

輪之内 遺跡

WANOUCHI

ISEKI

(主)浜田作木線下口工区 緊急地方道路整備(特一)工事予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書



2004年3月

島根県
羽須美村教育委員会

序

この報告書は島根県邑智郡羽須美村大字下口羽根布地内、羽須美村役場の北側（裏側）に所在する「輪之内遺跡」（島根県遺跡地図Ⅱ（右見編）G94）の発掘調査の成果です。

輪之内遺跡は平成9（1997）年当時 庁舎増築予定地であったことから埋蔵文化財有無確認調査を実施し、その存在が確認されました。羽須美村埋蔵文化財調査報告書第2集「坪ノ内遺跡・輪ノ内遺跡」1998年発行（遺跡の名称について、これまで「輪ノ内」としていましたが、「輪之内」が正しいことが判明しましたので、今後は「輪之内遺跡」に改称したいと考えております。）

平成15（2003）年、主要地方道 浜田作木線下口羽工区 緊急地方道路整備特殊改良第一種工事予定地が輪之内遺跡に接することから、事業者である島根県川本上木建築事務所と協議を行いました。協議の結果、遺跡の現状保存は不可能という結論に至り、原因者である同務所より委託を受け羽須美村教育委員会が調査主体となり調査を実施しました。

輪之内遺跡の調査は道路工事に際し急務であったにもかかわらず、本村で担当できる職員が他の業務で対応できない状況にあったことから、島根県文化財保護指導委員会に隣接する瑞穂町在住の吉川正氏に調査員をお願いしました。そして吉川氏に早く調査を引き受けさせていただいたことで、この度の遺跡の記録保存事業が可能となりました。発掘調査は調査地内の道路工事着工を控えていたことから、吉川氏と作業員の皆様には炎天下に加え休日返上という過酷な状況での実施となりました。輪之内遺跡発掘調査が無事完了することができたのは調査員の吉川正氏、発掘作業員の皆様、整理作業員の功労によることを申し上げます。

平成15年（2003）7月22日には、島根県文化財保護審議会委員の田中義昭先生、島根県教育庁文化財課の伊藤徳広氏による調査指導会を開催することができました。また7月29日には現地説明会を開催したところ、両大にもかかわらず34人の参加があり、熱心に質問をされる方や郷土史に対する想いを語られる方もあり関心の高さを実感致しました。石見町や浜田市からも参加をいただいたようです。さらに、島根県立三瓶自然館の中村唯史氏から輪之内遺跡の地形的環境について指導を受け、本報告書に寄稿していただきました。

最後となりますのが、ご尽力いただいた方々すべてをここで紹介することができませんが、研究者・関係諸機関等々多くの皆様からのご指導、協力を賜りましたことを厚くお礼申し上げますと共に、地元の皆様及び島根県川本上木建築事務所には、ご理解と惜しみないご支援ご配慮をいただきました、深く心より感謝致します。

今後とも羽須美村の文化財保護・活用行政について、ご指導の程宜しくお願い申し上げます。

平成16年3月

羽須美村教育委員会

教育長 日 高 隆

例　　言

1. 本書は、県道浜田作木線の改良工事にともない島根県川本上木事務所より委託を受け、羽須美村教育委員会が平成15年6月より8月まで実施した輪之内遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査体制は次のとおりである。

調査主体 羽須美村教育委員会

　　日高 隆 (教育長)

事務局 社会教育課

　　藤本 誠 (社会教育課長)

　　田中 知福 (社会教育課長補佐)

　　松川 成治 (地域教育コーディネーター)

　　田桑小夜子 (社会教育課主任上事)

　　角矢 永嗣 (社会教育課主任主事)

調査員 吉川 正 (島根県文化財保護指導委員)

調査指導 田中 義昭 (島根県文化財保護審議会委員)

　　伊藤 徳広 (島根県教育宣文化財課)

　　中村 唯史 (島根県立三瓶自然館)

発掘調査作業員

　　三好 安江 谷 ナミ子 富永富久恵 今村 元美

　　鐵口 幸代 三上 由浩 中村 勇太 月橋 保枝

整理作業員 三上 由浩

3. 発掘調査・報告書作成にあたり次の機関・関係各位の助言・協力を得ている。(敬称略・順不同)

島根県教育庁文化財課、島根県埋蔵文化財調査センター、西尾克己・柳浦俊一・原 裕司・鶴原博英・

原 拓矢

羽須美村文化財審議会

　　日高 豆 口羽 萬造 口羽 達也 嶋波 昭壯 小原 勝彦

4. 遺構・遺物の出土状況の実測、写真撮影・遺物の実測は吉川が行った。

5. 本報告書に掲載した上層図、遺構配置図、遺構・遺物の出土状況図、遺物の実測図のトレースは吉川が行った。

6. 本書の編集執筆は角矢永嗣の協力を得て吉川が行った。

7. 本書で使用した遺構記号は次のとおりである。

SI……堅穴住居跡 SB……堀立柱建物 P……柱穴(ピット) SX……土壤状遺構

8. 掘図中の方位は磁北を示している。レベル高は標高を示す。

9. 本文中の(5)は、註(5)で参考・引用文献・助言を文末に記している。

10. 本書に掲載した地図は国土地理院の許可を得て中央地図株式会社が作成した羽須美村全図(1:25000)からトリミングし使用した。

11. 出土した遺物・実測図・写真等の資料は、羽須美村教育委員会が保管している。

本文目次

例 言

I	輪之内遺跡発掘調査に至る経緯	1
II	遺跡の立地と環境	1
III	調査の概要	5
IV	遺構と遺物	7
V	考 察	23
VI	特別寄稿 輪之内遺跡の地形環境 中村 哉史	31

挿 図 目 次

第1図	輪之内遺跡周辺の遺跡分布図	2
第2図	輪之内遺跡調査区域図	4
第3図	輪之内遺跡土層図	6
第4図	輪之内遺跡遺構配置図	8
第5図	SX01実測図	9
第6図	SX02実測図	9
第7図	SX03実測図	10
第8図	SX04実測図	10
第9図	SX05・SX06実測図	11
第10図	SI01～SI03実測図	12
第11図	SI01出土遺物実測図（石器）	13
第12図	SI01出土遺物実測図	14
第13図	SI02出土遺物実測図	14
第14図	SI03出土遺物実測図	15
第15図	SI01～SI03上面付近出土遺物実測図	15
第16図	SB01実測図	16
第17図	SB01出土遺物実測図	16
第18図	SB01柱穴遺物出土状況実測図	17
第19図	第6層出土縄文土器実測図	17
第20図	I区黒色土層出土遺物実測図	18
第21図	II区第5層出土遺物実測図	19
第22図	I区耕作土・床土出土遺物実測図	20
第23図	II区耕作土・床土出土遺物実測図	21
第24図	輪之内遺跡出土白磁・青磁実測図	22
第25図	青磁描文実測図	22

I 輪之内遺跡発掘調査に至る経緯

輪之内遺跡は平成9年11月～12月に行われた羽須美村教育委員会による「村内埋蔵文化財有無確認調査」によってその所在が確認された遺跡である。この「村内埋蔵文化財確認調査」は、平成10年度から実施される予定であった中山間地域総合整備事業（原田地区廻場整備）予定地内の試掘調査として計画されたものであったが、原田地区廻場整備事業計画が変更となったことにより、島根県教育庁文化財課の指導を受け改めて村内の開発事業計画を検討し、将来の羽須美村役場建設の予定候補地である輪之内地区について試掘調査を行ったものである。⁽¹⁾

この時の試掘調査の結果、調査区の全域で古代・中世・近世の遺物などかなりの量出土したほか、トレンチE-2では上壇状造構や柱穴なども検出され遺跡であることが確認されたのである。

その後平成14年5月島根県川本土木建築事務所長より羽須美村教育委員会教育長に対して『(主)浜田作木線下口羽工区交A(特-1)工事に伴う「埋蔵文化財所在の有無及びその取り扱いについて』照会がなされた。このときの工事計画路線は今回の発掘調査地よりも少し北側に寄っており、試掘調査によって確認した遺跡の範囲の外側であったため、羽須美村教育委員会は工事予定地内には遺跡は所在しないとの回答をしたのである。

ところが平成15年1月になり『(主)浜田作木線下口羽工区緊急地方道路整備(特-1)工事』がルート変更されたことを受け「埋蔵文化財所在の有無及びその取り扱いについて』照会が再度提出された。これに対し羽須美村教育委員会から、「変更された工事予定ルートには輪之内遺跡が所在するのでできればルートを変更して欲しいこと、ルート変更が不可能な場合は遺跡の発掘調査が必要である」との回答がなされた。その後川本土木建築事務所と羽須美村教育委員会との間で協議が行われ、平成15年5月1日川本土木建築事務所長と羽須美村長との間で埋蔵文化財発掘委託契約書が取り交わされ、羽須美村教育委員会が発掘調査(原因者 川本土木建築事務所)を実施することになったものである。発掘調査は羽須美村教育委員会の文化財担当者が実施すべきであるが、他の事業との関係から文化財担当者が対応できなかつたため、羽須美村教育委員会の依頼により吉川 正(島根県文化財保護指導委員)が担当した。

なお、遺跡の名称については、平成9年の試掘調査から今日まで輪之内遺跡と呼ばれ、「島根県遺跡地図Ⅱ(石見編)」にもそのように記載されているが、今回の発掘調査に際して切り図で確認したところ正式な地名は「輪之内」であることが明らかとなったので、この報告書では「輪之内遺跡」としている。

II 遺跡の立地と環境

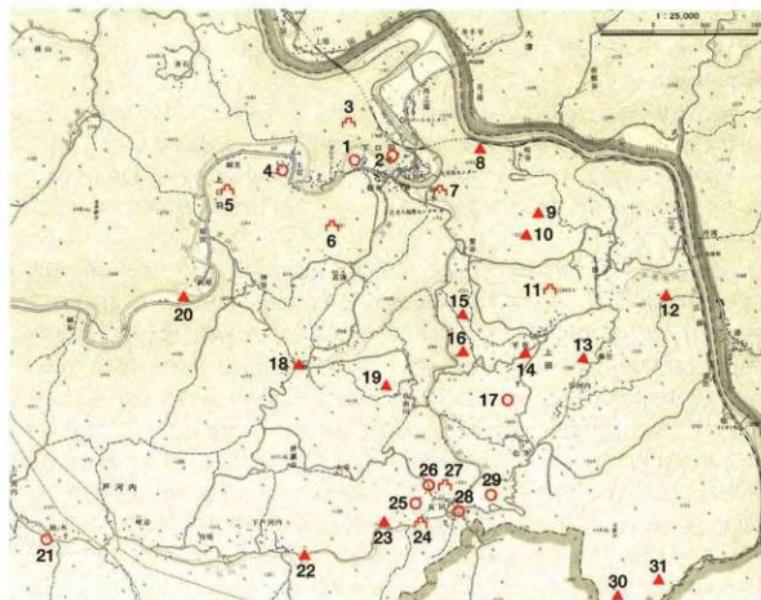
羽須美村は島根県の東西のほぼ中心、邑智郡の南東部に位置している。南は広島県高田郡高宮町・美土里町に接し、東は江の川を挟んで広島県双三郡作木村と向き合う県境の地であり、広島県北部の水を集め日本海に流れ込む江の川が島根県側に入る最初の地でもある。ここは旧国でいう石見・安芸・備後の三国の国境が接しており、古くから江の川を大動脈とする陰陽の交通の要衝として、また中世には石見・出雲に進出しようとする安芸毛利氏の拠点として重要な位置を占めていた地域でもある。

輪之内遺跡の所在する羽須美村下口羽根布集落は、瑞穂町の広島県境に源を發し、羽須美村を貫流して

下口羽で江の川に合流する出羽川の右岸に形成された沖積平地上に位置しており、すぐ近くに羽須美村役場が建ち民家が集中した現在の羽須美村の行政・文化の中心地である。

輪之内遺跡は、羽須美村役場から西（上手）にかけての沖積平地のやや高い部分に広がる比較的大規模な集落遺跡であると考えられるが、民家が建ち並び開発が進んでいることもあるってその範囲は必ずしも明確ではない。今回発掘調査した場所は、その調査結果からこの輪之内遺跡の北端に当たると考えられ、遺跡はここから南西に広がっているものと思われる。

羽須美村ではこれまで詳細な遺跡分布調査が行われていないこともあって、今までに知られている遺跡は、中世の山城や製鉄関係の遺跡を除けばその分布密度は極端に少ない。この輪之内遺跡周辺では宮尾山古墳（群）・中原古墳以外には宮尾山八幡宮の境内から出土したと伝えられる磨製石斧が知られるのみである。^②



第1図 輪之内遺跡周辺の遺跡分布図

- | | | | |
|---------------|---------------|--------------|-------------|
| 1. 輪之内遺跡 | 2. 宮尾山古墳群(消滅) | 3. 越畠甲(矢羽)城跡 | 4. 土居松ヶ段古墳 |
| 5. 稲屋城跡 | 6. 高畠城跡 | 7. 比(黒)丘人城跡 | 8. 板谷伊跡 |
| 9. 舛ヶ迫1号伊跡 | 10. 舛ヶ迫2号伊跡 | 11. 妙見城跡 | 12. 伊屋敷伊跡 |
| 13. 秋山伊跡 | 14. 青山伊跡 | 15. 鉢クソ1号伊跡 | 16. 鉢クソ2号伊跡 |
| 17. 次郎山古墳(消滅) | 18. 川角十伊跡 | 19. 日南川十伊跡 | 20. 坂口伊跡 |
| 21. 菅城遺跡 | 22. 坂本伊跡 | 23. 上映伊跡 | 24. 比丘人城跡 |
| 25. 坪ノ内遺跡 | 26. 横尾山古墳群 | 27. 横尾(鬼玉)城跡 | 28. 洋福寺横穴墓 |
| 29. 長田瓦窯跡 | 30. 古伊2号伊跡 | 31. 古伊1号伊跡 | |

このうち宮尾山八幡宮出土と伝えられる石斧は長さ約10cmほどの小型ではあるが非常に丁寧に作られた磨製石斧で、弥生時代のものであろうと考えられる。

宮尾山古墳（群）は『口羽郷上誌』によると大正9年境内を拡張したときに偶然発見されたもので、箱式石棺を主体とした古墳であったとされている。箱式石棺は長さ6尺（1.8m）幅2尺（0.6m）ほどと伝えられ一般的な規模のものであったようである。数については『口羽郷上誌』では3基、『邑智郡誌』では4基となっており、いずれにしても複数の古墳が所在した可能性が強い。遺物については鏃・鉤・直刀・鏡の残片のほか須恵器が出土したと伝えられているが、現存するのは須恵器の高壙3・蓋壙1・壙1・短頸壺1のみであり、その形式から古墳時代後期後半に作られた古墳（群）であったと考えられる。

中原古墳は、毛利元就の重臣であった口羽氏の菩提寺である宗林寺背後の尾根上に立地している。径約10m高さ1.5mほどの円墳であったと伝えられるが、後世にその西半分が大きく削り取られ、その後近年になって土を盛り上げ整備されるなど現況が大きく変えられているためその詳細は不明である。古墳であるとすれば木棺直葬でやや古い時期の古墳である可能性が強いが、中世古墓の基壙とする考え方もあり、今後の検討課題であろう。

この輪之内遺跡の周辺で知られている古代の遺跡はその数も少なく内容も不明な点が多いが、近年調査された菅城遺跡^⑩（戸河内）や坪ノ内遺跡^⑪（長川）では弥生時代から中世までの集落関連の遺構・遺物がかなりの量出土しており、こうした遺跡が広く分布している可能性を示している。大きく蛇行しながら流れる出羽川沿いには比較的恵まれた沖積平地がみられるが、こうした場所には現在の水田下に遺跡が眠っている可能性が強い。

遺跡の北正面には出羽川を挟んで口羽氏の居城琵琶甲城跡が聳えている。口羽（志道）氏は毛利軍の中核として重要な位置にあったが、享禄3年（1530）高橋氏の滅亡とともに口羽に入封し、慶長5年（1600）、岡ヶ原の戦いに敗れた毛利輝に従い長州萩に移るまでの約70年間ここを拠点として活躍したのである。琵琶甲城は三方を出羽川に囲まれた天然の要害であり、ここに立つと出羽川と江の川の合流点を見通すことができ、江の川の水運を監視する絶好の位置を占めていることがよくわかる。各郭の虎口部分には石が使われ堅固な作りになっているほか、江の川に面した主郭東側斜面には石が貼られていて、遠目には石垣の城に見えるように工夫されている。この城の縄張り図をよく見ると、主郭の西側では連続掘切を破壊して大きな郭が作られているようであり、より古い山城を口羽氏が現在の姿に改修したように見受けられるが、^⑫ 口羽氏以前に誰が拠っていたかは不明である。主郭南側の中腹には居住空間と考えられる郭群が存在するが、伝承では西側山麓の宗林寺の場所に口羽氏の居館があったと伝えられている。

遺跡の西側には幡屋城跡があり、麓の集落を土居といい居館と詰の城との関係を想起させる。幡屋城跡も三方を出羽川に囲まれた天然の要害に築かれた山城であるが、琵琶甲城跡に比較すればやや甘い縄張りであり、琵琶甲城よりも古い時期の山城と考えられ、口羽氏以前にこの地域を支配していた高橋氏の拠点の城であったと思われる。文明8年（1476）の高橋命千代と益田兼堯との契約に連判した口羽下野守光慶はこの幡屋城に在城していたものであろうか。また土居集落には善林寺という地名があり、付近には邑智郡で最大級の五輪塔など多くの石塔群が見られ幡屋城に関連したものと考えられている。ここでは平成12年村営住宅建設にともない中世古墓1基が調査されている。土居松ヶ段古墓と名づけられたこの古墓は、一辺3mの方形の石組み基壙を持ち、正面にはさらに一段の石組みが加えられていた。中央の土壙からは人骨のほか、土師質土器・青花焼・数珠・銅錢・釘などが出土したほか、基壙上部に撒かれた玉砂利には「一石一字の墨書き」が見られるものもあった。この古墓は出土した青花焼から16世紀前半のものと推定さ

れており、まさに幡屋城の時代と重なる時期のものである⁽⁶⁾。

さらに古墓の周辺からはこの古墓よりも古い時期の建物の礎石が検出されており、土居館の建物の一部ではないかと推定されている。

この幡屋城跡に関する記録・伝承はまったく残されていないが隣接する高畠城跡に関しては記録や伝承が残されている。しかし現在高畠城と言われている山には城跡らしき削平地は見られず人の手が加えられた痕跡は全く見られない。したがって現在幡屋城跡と呼んでいる場所が記録にある高畠城である可能性が極めて強い。

下口羽周辺には鉛跡などの製鉄関係の遺跡が多数分布している。邑智郡南部は近世から鉛製鉄が盛んに行われた地域であるが、羽須美村南部でも、上田・川角一帯は良質の砂鉄が産出されたといわれ、この周辺に製鉄関係の遺跡が集中している。大半は近世以降のものであるが、中世に遡るものもあると思われ、今後の分布調査でさらにその数が増えていくと考えられる。

このように輪之内遺跡の所在する羽須美村下口羽は、古代にかかる資料は少ないものの、中世以降は陰陽を結ぶ交通と流通の中継地として、また軍事上の要衝として重要な位置を占めていた。今回の輪之内遺跡の発掘調査でもこうした歴史的背景を彷彿させる遺物が少なからず出土している。今後の調査研究の楽しみな地域といえよう。



第2図 輪之内遺跡調査区域図

III 調査の概要

輪之内遺跡の調査は、平成15（2003）年6月3日から同年8月10日までを要した。調査区の面積が132.0m²とあまり広くもないのにかなりの時間がかかったのは、調査開始後江の川漁業協同組合との協議のため一時調査を中断したこと、例年ない梅雨時の長雨によるものである。

調査は調査区のほぼ中央に南北に上層観察のためのあぜを設定し、その西側をⅠ区・東側をⅡ区として全面調査を行った。（第2図）

調査の結果、水田耕作土・水田基盤層（客土）の下にはかなり厚く人頭大の様を多量に含む黒色砂礫層が堆積し、これより下はまったくの無遺物層となり黄褐色砂礫層・黃色砂層・黑色砂層の順に堆積していく。

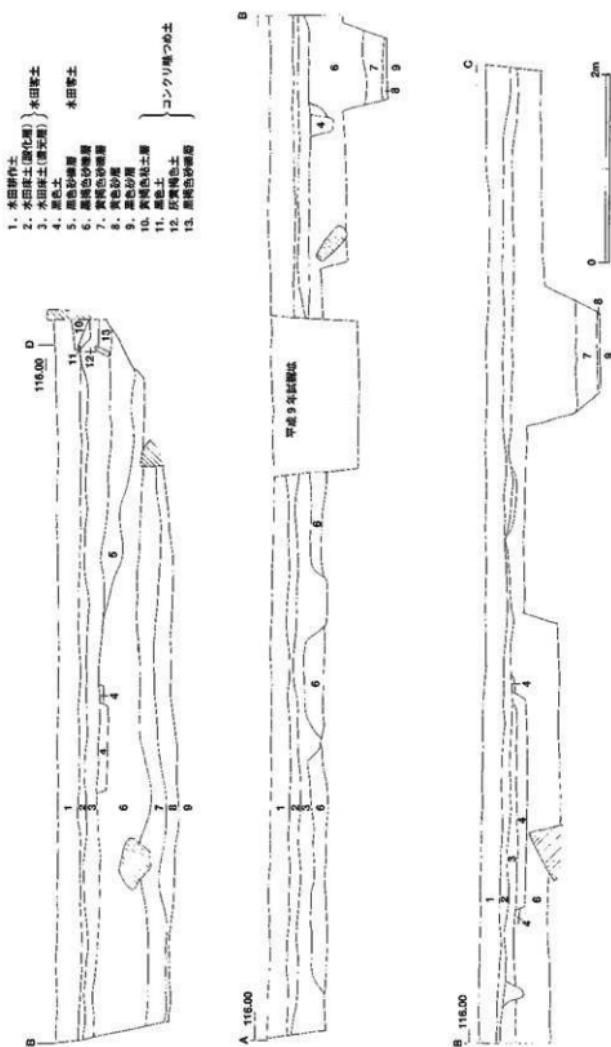
水田耕作土中からは耕作中に落ち込んだガラス製品（ビーエ・おはじきなど）・プラスチック製品・近代の陶磁器などに混じって、水田基盤層から浮き上がったと考えられる中近世の陶磁器とともに土師器・須恵器の細片が少量出土している。

水田基盤層は水田を作る際に他から運ばれた客土で、上面付近は酸化して茶褐色を呈し、その下は還元されてやや灰色がかっている。この客土中からは土師器・土師質土器・須恵器・中近世の陶磁器などの細片がかなりの量出土している。第5層は第Ⅱ区の中央あたりから北側の出羽川に向かって地形が少し傾斜しているために盛られた客土である。この層からも上師器・須恵器・陶磁器などの細片が出土した。これらの客土中の遺物から、この場所が現在の形に水田化されたのは江戸時代後半、遅くとも近代の初頭ころであったと推定できる。こうした客土がどこから運ばれたのかははっきりとしないが、この場所のすぐ近く、現在の県道浜田作木線あたりから運ばれたと考えられ、おそらく遺跡の中心はそのあたりにあったものと推定される。

今回発掘調査した場所は、平成9年羽須美村教育委員会により「埋蔵文化財有無確認試掘調査」が行われた場所であり、今回の調査区内にも2ヶ所でそのときの試掘溝を確認できた。このときの調査報告書をみると、須恵器・土師器などの遺物が出土したもの明確な遺構は検出されなかったようであり、今回調査を始めた当初、遺構は検出できないのではないかと考えていた。しかし第3層（客土）を取り除き第6層の上面を精査したところ、この面でいくつかの柱穴状・土壤状の落ち込みを検出した。その多くは第3層の客土と同じ土が入っており新しい時期のものであったが、黒色土の入った比較的古い時期のものと思われるものもいくつか検出された。第6層は人頭大の石が足の踏み場もないほど散乱しその間を黒色土が充満している層であるが、この面をさらによく観察してみると1区の中央から南東にかけて、他の場所よりも石が少なく、土師器・須恵器のみが出土するところがあることに気がついた。人為的に石が抜かれている可能性があると考えてこの場所を慎重に掘り進めた結果、遺存状態は良くなかったが、切り合ひ関係にある3棟の住居跡を検出できた。

Ⅱ区では中央南より付近でやや石が少なく全体に黒っぽいところが見られたが、ごく浅いもので明確な遺構とはならなかった。しかし第6層の上面でL字状に並ぶ柱穴群を検出し、掘っ立て柱の建物が建っていたものと考えたが、調査区域外まで延びているため全体の姿は不明である。

第6層に掘り込まれたこれらの遺構を完掘した後、より古い時期の遺構が残されている可能性も考慮してトレンチを設定し第6層を掘り下げた。その結果第6層の中間あたりから縄文土器1点を検出した。こ



第3図 輪之内遺跡土層図

のためトレンチを拡張して第6層を掘り下げたが他に1点が出土したのみで、縄文土器に伴う遺構・遺物は検出できなかった。第7層の上面でも遺構らしきものは検出できなかったためこれ以下は無遺物層であろうと判断した。

第7層以下については、念のため南北に2本のトレンチを設定しさらに掘り下げてみたところ、非常に粒子の細かい黄色砂層・黒色砂層の堆積が見られたが想定していたようにまったくの無遺物層であった。

こうした土層の堆積状況については、県立三瓶自然館指導員 中村唯史氏に現地を見ていただき、この輪之内遺跡の立地する沖積平地の成立過程について見解を示していただく予定であったが、日程的に都合がつかなかつたためサンプルを採集して調査を終了した。

その後9月22日に中村氏にサンプルと写真を見ていただく機会を得た。その結果については中村氏に貴重な原稿をいただきこの報告書に掲載している。

IV 遺構と遺物

1. 基本層序（第3図）

今回調査した場所は水田であり、水田耕作土の下の基盤層は厚い客土（第2、3層）である。この客土中からは土師器・須恵器・陶磁器などの遺物がかなり出土している。この下は人頭大の礫を多量に含む黒褐色砂礫層（第6層）であり、遺構（第4層）はこの層に掘り込まれているが、上部が削り取られていることもあり遺構の遺存状態はあまり良くなかった。この第6層は第2調査区の北で出羽川に向かって次第に傾斜しているためこの場所では客土（第5層）がみられる。これは黒色砂礫質で第6層の上に乗っていた旧表土を削り客土としたものと考えられ、この層の下半分程度は旧表土がそのまま残っていた可能性があるが分層できなかった。この層からも少量の土師質土器・須恵器・陶磁器などが出土している。

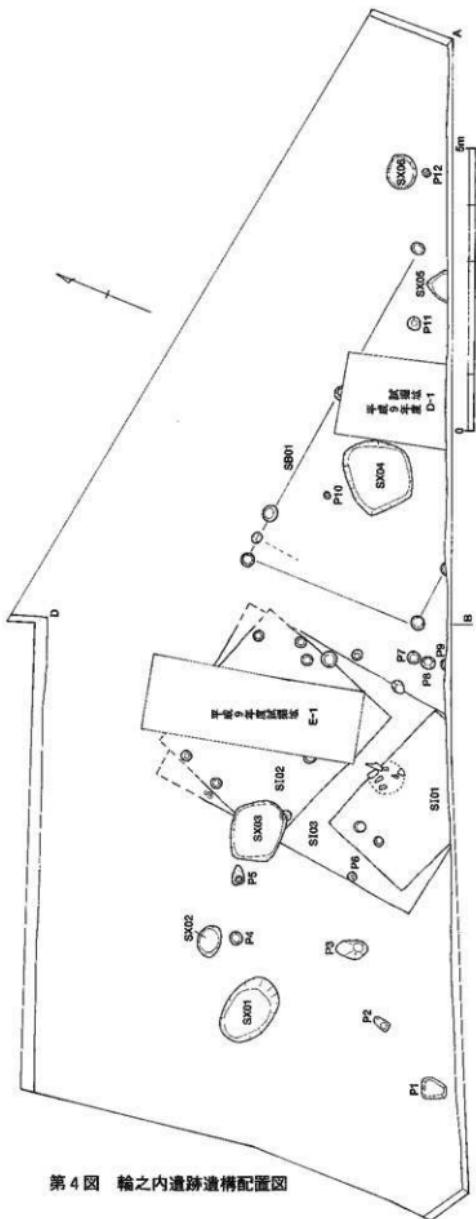
この第5層の上面はほぼ水平であることからある時期にはここが水田の基盤であった可能性が考えられる。現在の水田はその基盤層（2、3層）の出土遺物から江戸時代の後半あるいは近代の初頭に作られたものであろうが、それ以前に水田があったものがこの時期に基盤整備が行われたか、あるいは何らかの事情（水害等による流出など）により新たに客土をして水田を作ったものと考えられる。

第6層からは縄文土器2点が出土したが遺構は検出できなかった。2次的な堆積と考えられるが土器の表面があまり磨滅していないことから近くにこの時代の遺構があったことが考えられる。7層以下は出羽川によってもたらされた砂の層であり全くの無遺物層である。

2. 検出した遺構と遺物

遺構としては第6層に掘り込まれた柱穴状のビット多数のほか、浅い土壌状の落ち込み6、調査区の中央あたりで切り合ひ関係にある堅穴状の建物3棟、その東側で掘っ立て柱建物の柱跡を検出した。（第4図）柱穴状のビットのうち、P2・P3・P4・P5・P6・P8・P10には3層の客土と同じ土が入っていたことから新しい時期のものと判断した。P1・P7・P9・P11・P12には黒色土が入っており、P1・P7・P9からは土師器の細片が出土していることからかなり古い時代のものである可能性が高いが、今回の調査ではその時期や性格を判断することができなかった。

調査区中央付近の3棟の建物跡については、その遺存状況が良くないこともあってその検出に苦労した。



第4図 輪之内遺跡遺構配置図

SI03は上部が削平され床面まで数cmしか残っておらず、SI01・SI02はSI03の埋土である黒色土に掘り込まれていたことによる。

遺構は人頭大の礫を多量に含む黒褐色土層に掘り込まれていたが、遺構のある場所だけは石が抜き取られ黒色土が堆積していた。そこで10cm間隔でスポークを挿し、礫の残るラインを確認しながら調査を進め、最終的に3棟の建物跡を検出することができた。

SB03については遺物を伴う確実な柱穴を基準として建物跡を推定した。

SI03周辺には古代まで確実にさかのばるいくつかのピットが存在するが、今回の調査範囲だけでは建物跡を復元することはできなかった。

SX01（第5図）

123cm×90cm深さ8cmほどの楕円形の上槽である。黄灰白色の全く礫を含まない細かな砂質土が入っていた。上築器の細片1と少量の炭が出土しているがその時期は不明である。

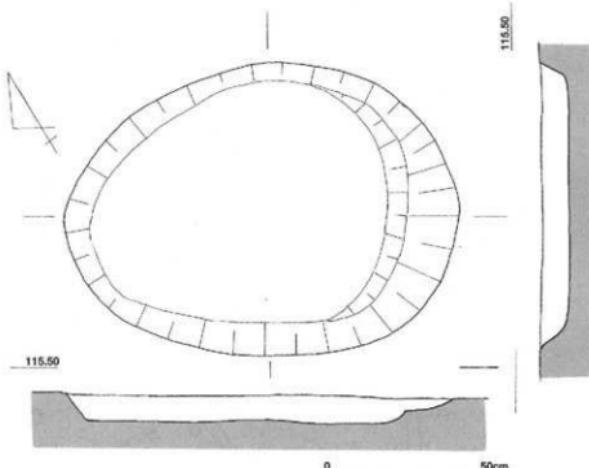
埋土が周辺で見られないものであることから、意図的に作られたものではあるがその時期や性格は不明である。

SX02（第6図）

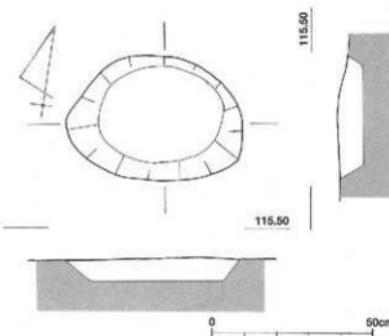
38cm×54cm、深さ7cmの楕円形の土槽でSX01と同じような黄灰白色の全く礫を含まない砂質土が入っており、SX01と同じ性格のものと考えられる。

SX03（第7図）

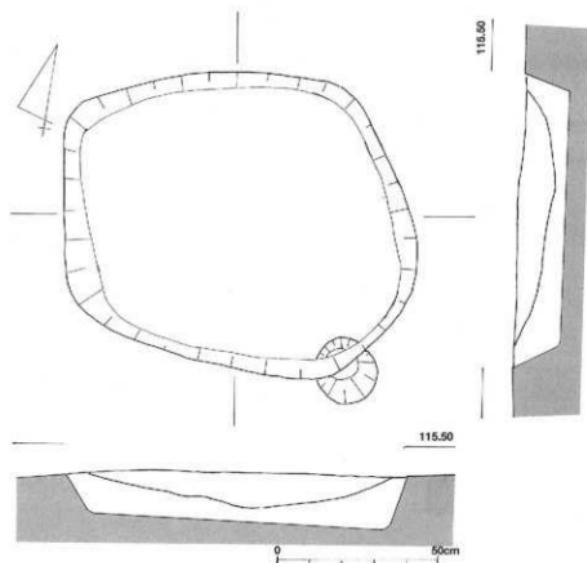
108cm×89cm、深さ14cmの楕円形の土槽である。埋土は黄灰白色土と明黄褐色土の2層に分層することができる。上部の黄灰白色土中にはかなりの焼土や炭が含まれていた。



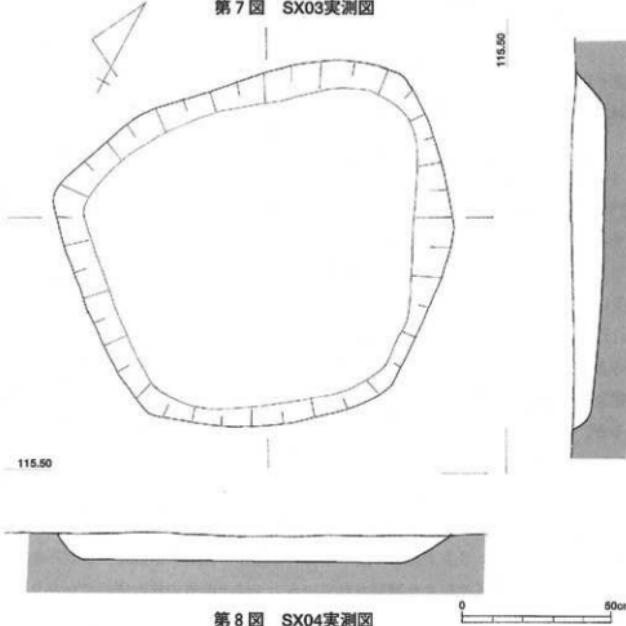
第5図 SX01実測図



第6図 SX02実測図



第7図 SX03実測図



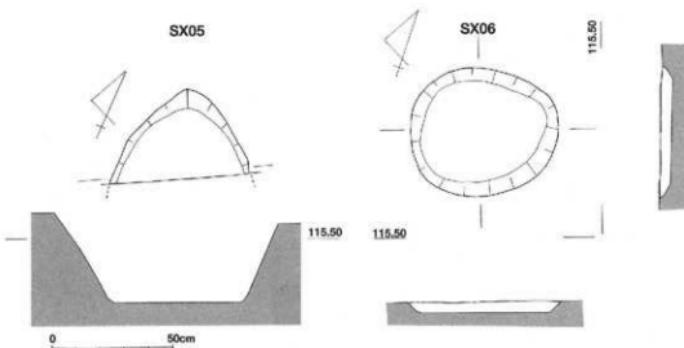
第8図 SX04実測図

SX04 (第8図)

91cm×83cm、深さ7cmのいびつな楕円形土壙である。やはり黄灰白色の砂質土が入っている。

SX05 (第9図)

調査区域外まで広がるため全体の大きさは不明であるが、深さ35cm、底幅54cmの土壙で、おおむね楕円形になるものと考えられる。埋土には客土が入っており新しい時期のものと思われる。



第9図 SX05・SX06実測図

SX06 (第9図)

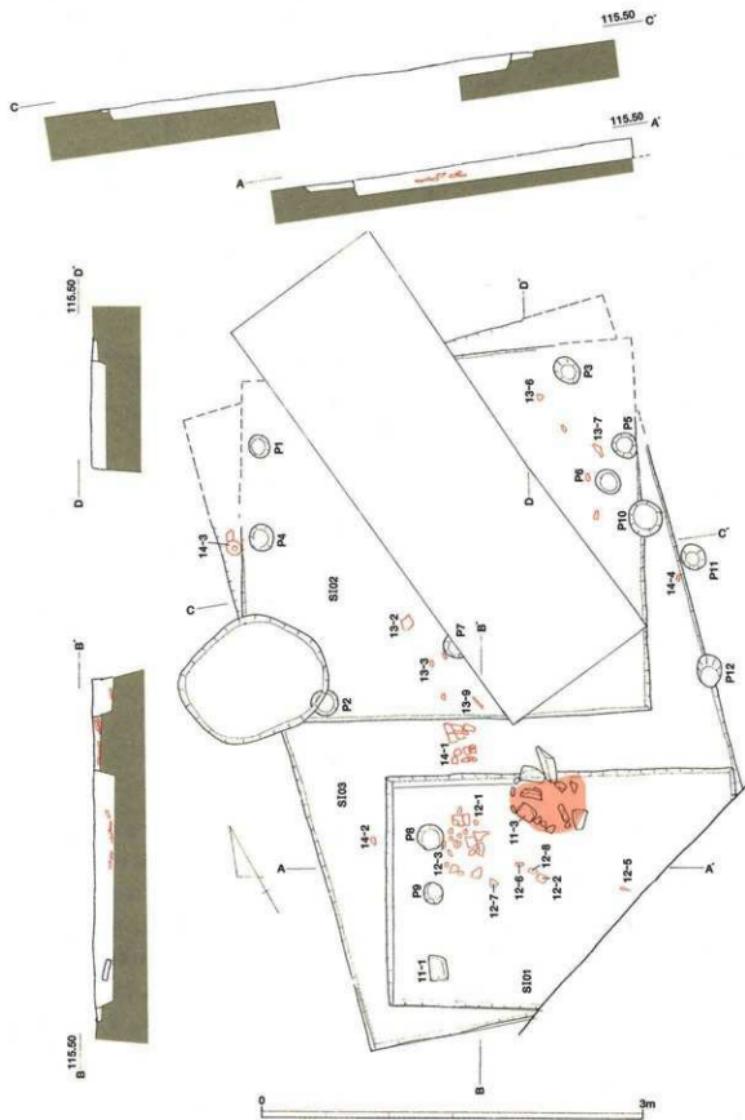
61cm×54cmで現状での深さは4cmほどの楕円形の落ち込みである。埋土は客土と同じであり新しい時期のものと考えられる。

SI01 (第10図)

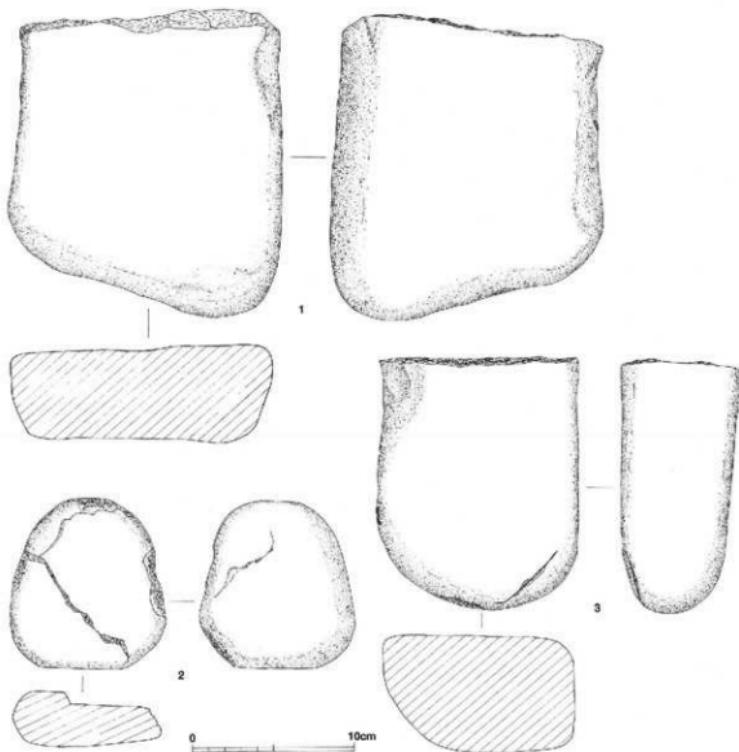
一部調査区域外にかかるが、2.7m×1.8mの方形の小規模な建物跡である。西壁中央付近にある深さ10cmのP9がこの建物跡に伴う柱穴と考えられ、2本柱の建物であったと推定される。北壁の中央付近には床面に礫を置きその上に60cmほどの範囲に粘土塊がおかれていた。この粘土塊は固く叩き締められているが、上部が削平されているため全体の形状は不明である。その表面付近は熱を受けて赤変していたが、特別高い温度を受けているというほどでもなかった。この粘土塊の下に置かれた礫の中には表面が摩滅するほど使い込まれた礫1(第11図2)と鉄宰1がみられた。

遺物としては建物の北西より床面より少し浮いた状態で土師器の壺が残されていたほか、床面近くから土師器・須恵器の細片数点・使用痕のある礫2点が出土している。(第12図)

1は底部を欠いているが、口径17.6cm、高さ約17cmのやや扁平な土師器の壺である。胎土に白い砂粒を含み、黄茶褐色を呈し焼成は良好で、外面全体にススが付着している。外面胴部は横方向、底部は縦に荒いハケ目が施され、内面は縦ハケの後丁寧にナデ消されている。2は口径17cmほどの土師器の壺で、タクシにより整形されており、内面の青海波は丁寧にナデ消している。胎土には砂をほとんど含んでおらず焼成は良好で、暗茶褐色を呈している。3も土師器の壺である。胎土には細かい砂粒を少量含み赤褐色を呈し焼成は良好である。内面は荒いケズリにより調整されている。4は土師質の壺の底部でかなり風化しているが、底部はヘラ切りの後細かいハケ目調整がなされている。5は須恵器の蓋である。口径は17cm



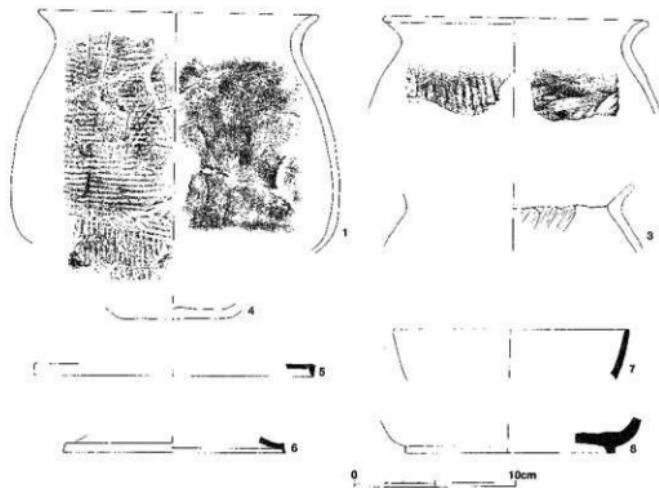
第10図 SI01～SI03遺構実測図



第11図 SI01出土石器実測図

ほどになるものと思われ薄く丁寧に作られている。胎土には砂粒がほとんど含まれておらず、黒青灰色を呈し焼成は良好である。壺などの蓋かと思われる。6は外面の自然輪から高輪の脚部であろうと考えた。底径14cmほどで、胎土に少量の細かい砂粒を含み青灰色を呈し焼成は良好であり、非常に薄く丁寧に作られている。7は全体に白っぽく焼成の悪い坏身である。口径は14cmあまりになり、高台の付くタイプであろうと思われる。8は青灰色で焼成の非常に良い坏身である。胎土には細かく白い砂粒を含んでおり、直径は13cmである。第11図1は建物の西隅付近で床面から少し浮いた状態で出土してるので、川原石を利用して何らかの台として使用されたものであり、平坦な両面はかなり磨滅している。2は川原石を利用した蔽石で下端は平坦になるほど磨滅しているほか、平坦な両面にも使用痕が認められる。3は粘土塊の下に置かれていたもので平坦な3つの面はかなり磨り減っている。石材はいずれも花崗岩であり、2と3は熱を受けている。

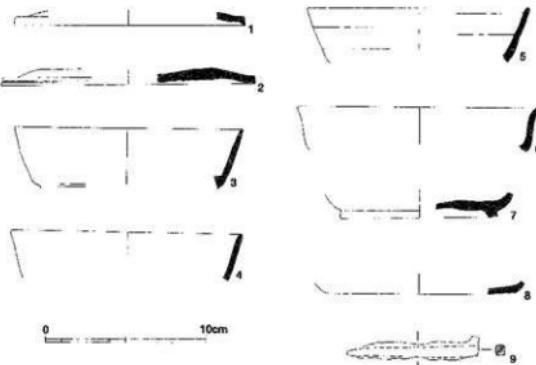
この建物は出土した須恵器の特徴から9世紀中葉のものと推定できる。



第12図 SI01出土遺物実測図

SI02 (第10図)

3.0m×2.9mのほぼ正方形の堅穴式住居跡であるが、北側は水田化により造構面が削られており、床面の中央部は平成9年度の試掘調査により破壊されているため全体として遺存状態は良くなかった。床面からは柱穴状のビットがいくつか検出されているがこの住居跡に確実に住うといえるものは断定できなかった。遺物としては残された床面付近から土師器・須恵器の細片が少量出土しているほか、棒状の鉄製品が出土している。(第13図) 1・2は須恵器の坏蓋である。いずれも胎土に細かな白い砂を少量含み、焼成は良好で青灰色を呈している。このうち1は径が14.3cmで輪状のつまみの付くタイプと思われる。2は径が15.8cmのやや大型のものであり、本来はボタン状のつまみの付くタイプであろうと考えられるが、観として転用されたものでその内面はかなり擦り減っている。3～7は坏身である。いずれも7と同様の高台の付くタイプと考えられ、このうち6は器高が低く口径が大きいが、他は径が14cm前後である。



第13図 SI02出土遺物実測図

われる。2は径が15.8cmのやや大型のものであり、本来はボタン状のつまみの付くタイプであろうと考えられるが、観として転用されたものでその内面はかなり擦り減っている。3～7は坏身である。いずれも7と同様の高台の付くタイプと考えられ、このうち6は器高が低く口径が大きいが、他は径が14cm前後である。

後の規格品である。8は平底の壺身である。これらの須恵器は5は焼成がやや悪く白っぽいものの、他は青灰色を呈し堅く焼き上げられている。胎土にはいずれも細かく白い砂粒が少量含まれている。9は現長8cmほどの棒状の鉄製品で、断面は7mmほどの正方形であり、片方の端部は丸く仕上げられている。切損しているため本来の長さは不明である。鉄鎌の根の部分かと思われる。

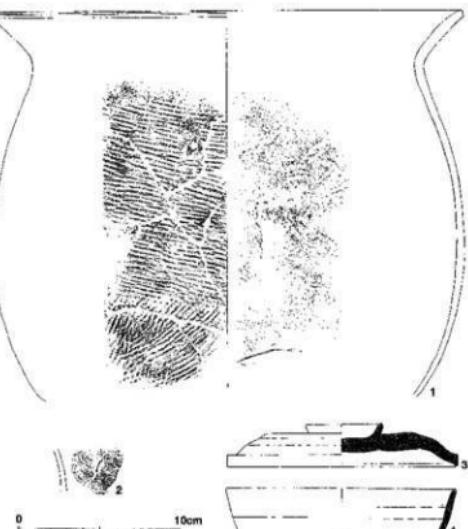
この建物も出土した須恵器の特徴から9世紀中葉のものと推定できる。

SI03（第11図）

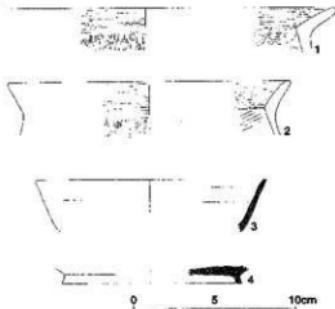
一部調査区域外に延びていること、水戸化に伴い上部が削られていることや、SI01・SI02が重なっているため造構の残りが悪いが、5.2m×3.4mほどの比較的規模の大きい方形の豊穴住居跡と推定される。P1・P2・P3がこの住居跡に伴う柱跡と考えられ、長辺に3本ずつの6本柱の建物であった可

能性が強い。この住居跡に伴う遺物としては土師器壺・須恵器などが出土している。（第14図）1はSI01とSI02の間にわずかに残された床面から出土したもので、上部が削平されているため床面に着いた部分しか残されていなかったが、口径29cm、胴部幅30cm余のタキ技法により整形された大型の壺である。胎土は細かく、器壁は薄く強く焼き締められており、外面には胴部は横方向、底部は斜め方向に荒いハケが施され、ススが付着している。2は土師器の壺の胴部細片である。胎土は細かく焼成はやや甘く赤褐色を呈している。内面はケズリの後丁寧にナデがみられ、外面上には細かなハケ目が施されている。3は須恵器の壺蓋である。今回の調査で出土した唯一の完形品で、住居跡の西壁付近で須恵器の壺の胴部破片に重なっていた。口径14.3cm輪状つまみの径4.8cm・高さは2.7cmほどであり、胎土には細かな白い砂を少量含んでいる。器壁は厚く、焼成は良好で青灰色を呈している。内面はわずかに磨滅しており墨が付着しているように見えることから硯として使用された可能性がある。4は須恵器の壺身である。口径は14.2cmほどであり、白っぽく焼成はあまり良くない。この建物は出土した須恵器の特徴から9世紀前半のものと推定できる

第15図1～4はSI04～SI03の検出面から出土した遺物である。いずれかの建物に伴うものであると考

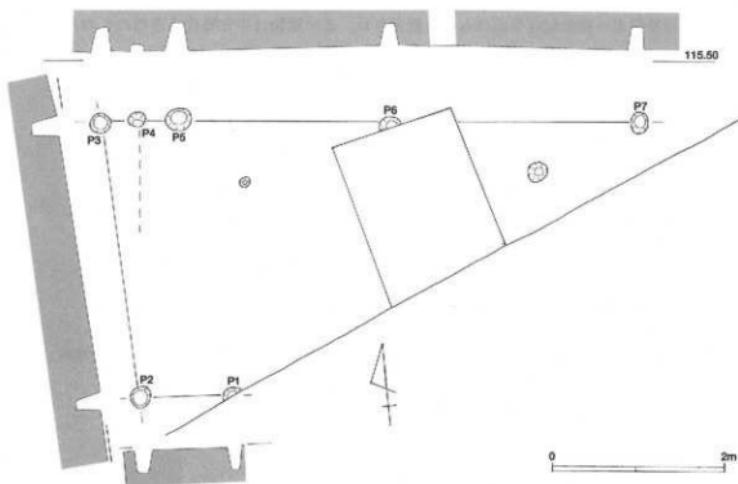


第14図 SI03出土遺物実測図



第15図 SI01～SI03上面付近出土遺物実測図

えられるがその関係を特定することはできなかった。1・2は土師器の甕の細片であり、口縁部は横ハケ、胴部外面は細かな継ハケが施され、内面胴部以下にはケズリがみられる。1の外面には煤が付着している。3・4は須恵器の杯身である。

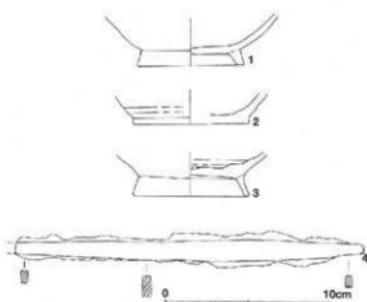


第16図 SB01実測図

SB01（第16図）

SB01は掘立柱の建物跡である。調査した範囲内での柱穴の配置から1間×2間（3.2m×6.5m）の建物を復元できるが、邑智郡内での他の遺跡での同時期の建物跡の調査例から、建物の本体は調査区の南側にあり、今回検出した部分はこの建物の底部分に当たる可能性が強いと考えている。P4はごく浅く中に大きな石があることから柱穴を掘ることを中止し新たにP3に柱を立てたものと考えられる。

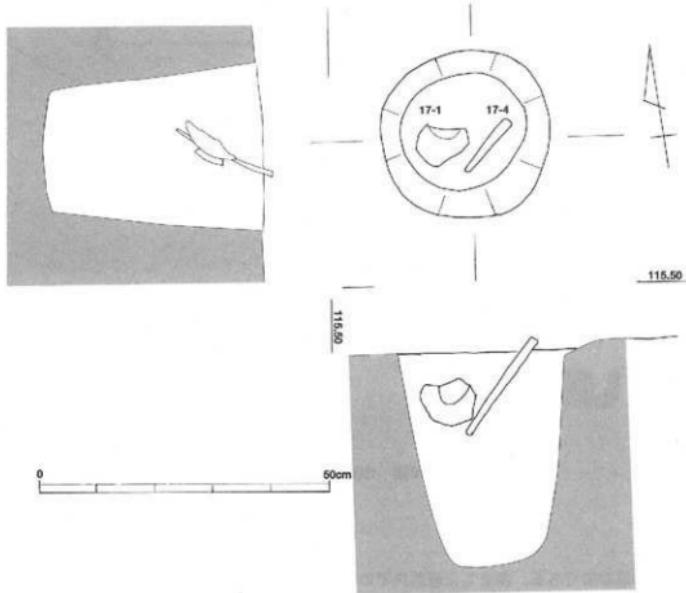
この建物に伴う遺物としてはP5から土師質土器と棒状の鉄製品が出土している（第17図1・3）が、20cm以上もある鉄製品が偶然ピットに流れ込むということはあまり考えられないことから、建物の廃絶の段階で意図的に入れられた可能性が強いと考えている。1は底径6.4cmの甕で口縁部を欠損している。胎土は細かく焼成はやや不良で白っぽい黄褐色を呈しており、底部はヘラ切りの後高台を貼り付け横ハケにより調整されている。4は断面長方形の鉄製品で先端部



第17図 SB01出土遺物実測図

を欠損しているが、中央部がやや太く両端は少し細くなっている。一方の端部は丸くなつており柄に装着して使用されたものであろうがその用途は不明である。

2・3は掘立柱建物の検出面付近で出土した土師質の环であるが、直接この建物に伴うものであるかどうかは不明である。いずれも底部は糸切りにより切り離されており、ナデによる調整が施されている。これらの遺物は11世紀末～12世紀前半頃のものと推定され、この建物は平安時代後期頃のものと考えることができる。



第18図 SB01柱穴遺物出土状況実測図

3. 遺構に伴わない遺物

1. 第6層出土遺物（第19図）

遺構をすべて掘り上げた後、念のためその下層を掘り下げるところ、2区第6層の中間あたりから縄文土器細片2点が出土した。1は細い沈線と縄文による磨消文を施された波状口縁を持つ鉢型土器の口縁部である。もう1点は無文の細片であり図示しなかった。

2. I区黒色土層出土遺物（第20図）

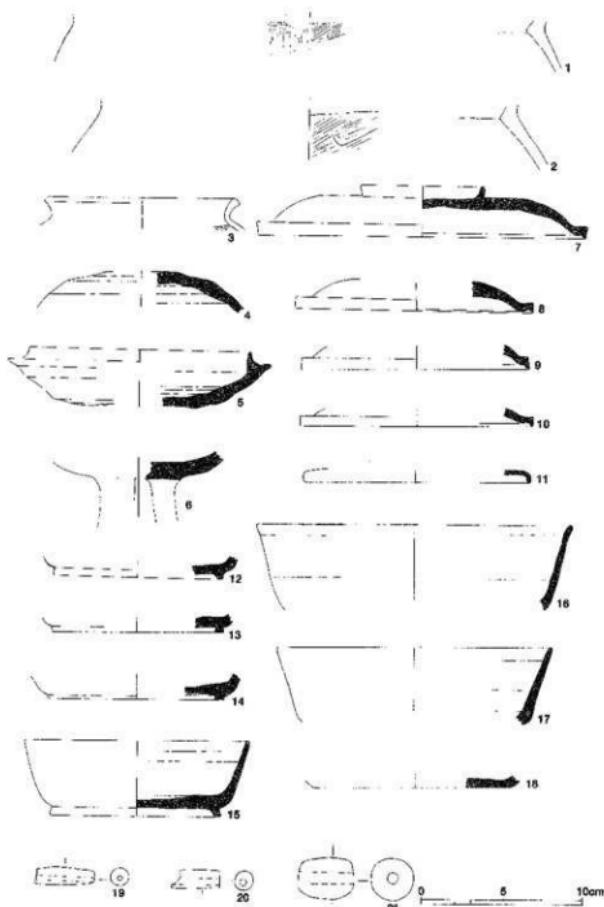
1区のSI01～SI03の上部にわずかに黒色土の堆積がみられ、この中からかなりの量の遺物が出土している。この層は遺構付近しかみられないことから、遺構が若干埋没した後のくぼみに周辺の旧表土が流入することにより堆積したものと考えられるが、上部が削られていることもあって、もともと遺構に伴



第19図 第6層土器実測図

っていたであろう遺物と周辺から流れ込んだと思われる遺物が共伴していた。

1・2は土師器の蓋の頸部でいずれも胎土に荒い砂粒を含み、外面は横ハケ・縱ハケで調整され、内面はケズリがみられる。3は薄く丁寧に作られた壺の口縁部であるが焼成が悪くかなり風化している。4～18は須恵器である。4・5は蓋坏でありセットとなる可能性が強い。胎土に少量の砂粒を含み焼成は良い。底部はヘラ切の後ケズリが見られるが全体的に雑な調整である。6は高杯であり脚部に2ヶ所の透かし孔がみられる。焼成はやや悪いが丁寧に作られている。4～6の須恵器は今回出土した須恵器のなかで



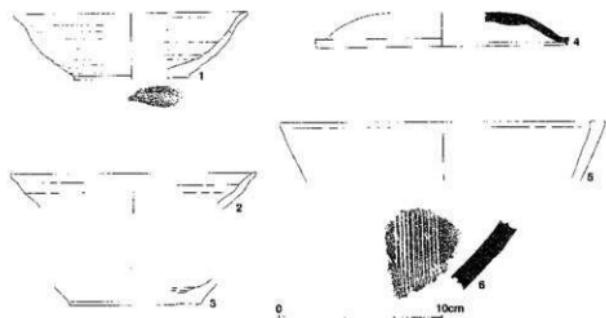
第20図 I区黒色土層出土遺物実測図

比較的古い様相を示しており注目される。7～10は壺の蓋である。いずれも胎土に細かな白い砂粒を少量含んでおり、焼成は良好で青灰色を呈している。このうち7は口径20cmの大型のもので内面がかなり磨滅しており硯として転用されたものである。11は薄く丁寧に作られており壺などの蓋かと思われる。12～15は高台の付く壺身である。このうち13は内面がかなり磨滅しており硯として転用されたものと考えられる。15は今回出土したのは体部の細片であるが平成9年の試掘調査の出土した底部と接合できたものである。16・17は壺身の体部であり、18は平底の壺身の底部である。このうち16は口径19.4cmの大型品であり7に見られるような大型の蓋とセットになるものと考えられる。18は内面が磨滅しており硯として転用されたものであろう。19～21は土師質の土錘である。

3. II区第5層出土遺物（第21図）

第5層は出羽川に向かって自然傾斜している地形を平坦にするために盛られた客土であり、調査区の中央あたりから北東にのみみられた土層である。上部の客土（第3層）よりもかなり早い段階での客土と考えられ、ここからも少量の土器の細片が出土している。

1～3は土師質の壺・皿である。このうち1・3は底部に糸切痕が見られ、体部は回転ナデにより調整されている。4は口径が15.4cmほどのやや大型の須恵器の壺蓋である。胎土

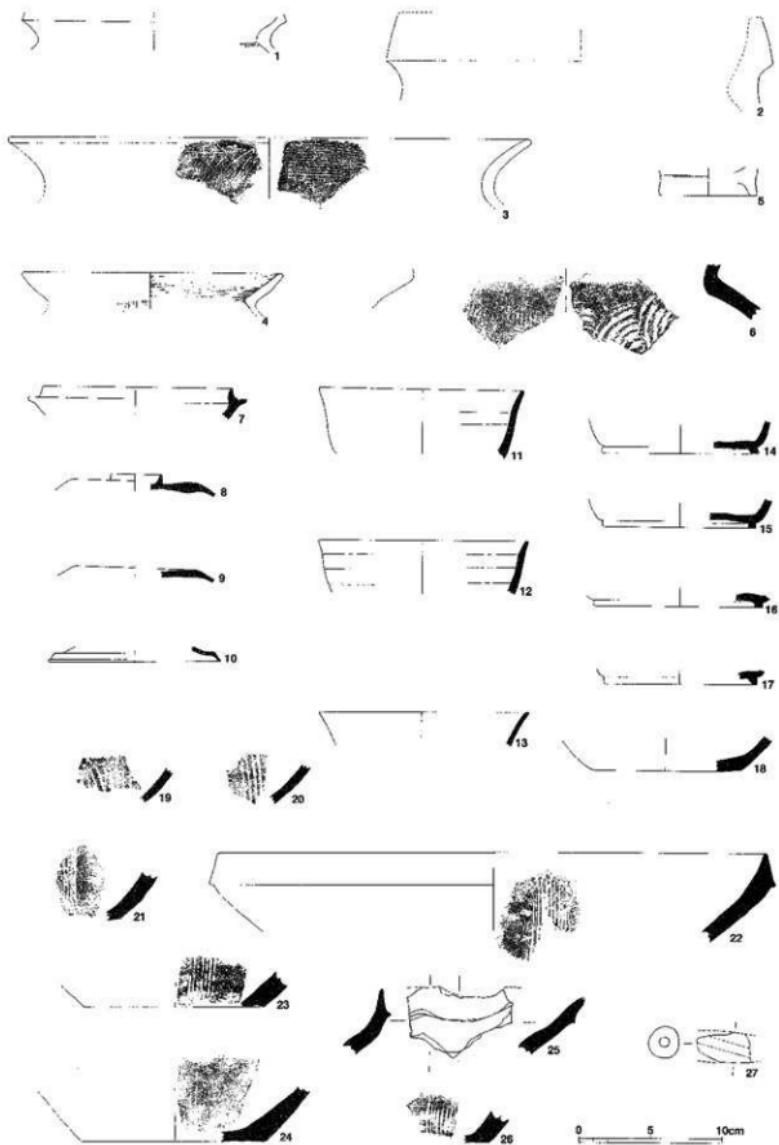


第21図 II区5層出土遺物実測図

に細かく白い砂粒を含み、焼成は良く青灰色を呈している。5は口径20cmほどの陶質の深鉢で暗赤褐色に硬く焼かれているが、外面は熱を受け赤変しており、内外に少量の煤が付着している。6は赤褐色を呈する備前焼の擂鉢である。

4. I区耕作土・床土出土遺物（第22図）

耕作土中には水田耕作時に落ち込んだ近・現代の陶磁器やプラスチック製品・ガラス製のビーカーなどおはじきなどのほか、客土中から浮き上がったと考えられる土師器・須恵器や陶磁器の細片が少量出土している。水田床土（客土）中からは須恵器・土師器・陶磁器・土鍤などがかなりの量出土しているがそのほとんどは細片であり、量としては大半が須恵器である。陶磁器はその多くが中世のものと考えられるが、近世のものも少量認められる。このことからこの場所が水田化されたのは江戸時代の後半～近世初頭であったと推定できる。1は複合口縁をもつ壺の口縁部で、口縁部は横ハケ・内面胴部以下にはケズリが施されている。弥生時代後期後半のものと考えられる。2も複合口縁をもつ大型の壺の口縁部である。胎土には荒い砂粒を多量に含んでいるが、全体がかなり風化しているため詳細は不明である。弥生末～古墳時代初頭のものと考えられる。3は大型の土師器壺の口縁部である。胎土中には砂粒を含み内面は横ハケ、外面は縱方向の粗いハケ目が見られる。4も土師器壺の口縁部である。胎土には砂粒を含み、内面口縁部は横ハケ・胴部以下はケズリがみられ、外面胴部以下は縱ハケがみられる。5は土師質の高台を持つ壺の脚部である。6～18は須恵器である。6は壺の頸部で内面頸部以下には荒い青海波がみられる。7は壺身である。細片であるため調整などは不明であるが、第20図5と同様のものであり、比較的古い時期のものである。8～10は壺の蓋であり、8・9には外面に自然釉が見られ、10は特に薄く丁寧に作られている。11～18は壺身である。このうち11～13は壺の体部であり14～17に見られるような高台の付くタイプと考えられる。18は平底の壺の底部である。これらの壺身の口径は14cmあまり、高台の径は11cmあまりの規格品であるが、17の高台の断面形はこの地域ではあまり見られないものである。16については硯として転用された可能性がある。これらの須恵器はその胎土中に細かな白い砂粒を少量含んでいるものが多く、焼成も良好である。19～26は擂鉢である。このうち20は土師質のもので

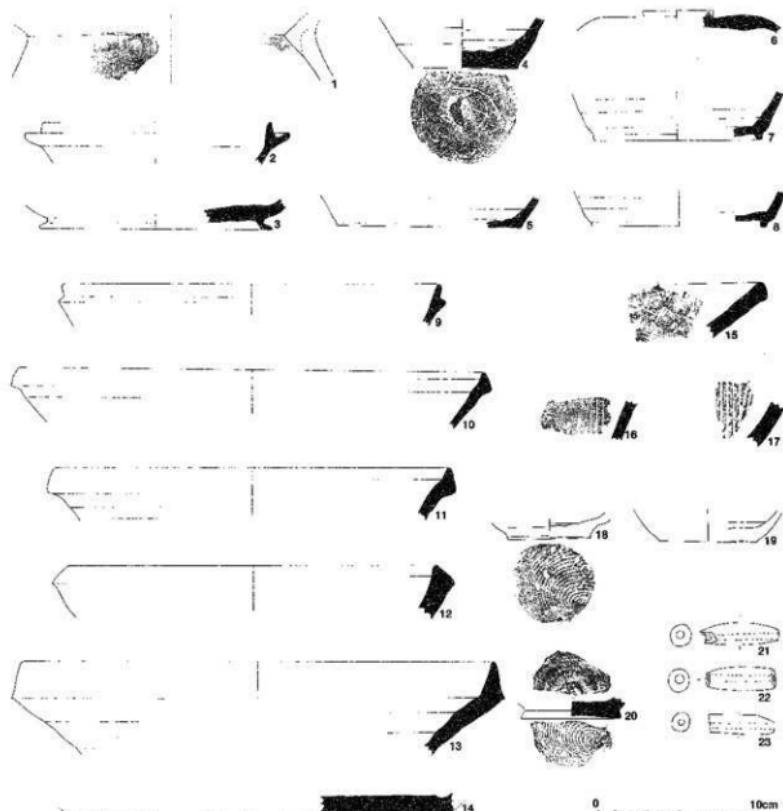


第22図 I区耕作土・床土（客土）出土遺物実測図

あり、19・21・23は須恵質である。22・24～26は備前焼の擂鉢で、25は片口部であり26と同一個体の可能性がある。これらの擂鉢は使い込まれ内面がかなり磨り減っているものが多い。22の備前焼擂鉢は備前4期後半の特徴を持っていることから15世紀中葉のものと考えられる。27は土師質の土鍬である。

5. II 区耕作土・床土（客土）出土遺物（第23図）

II区の耕作土・床土（客土）中からもかなりの量の遺物が出土しているが、I区に比較すれば土師器・須恵器の量が少なく、土師質の壺や備前系の擂鉢・青磁などやや新しい時期の遺物が多いという特徴がある。



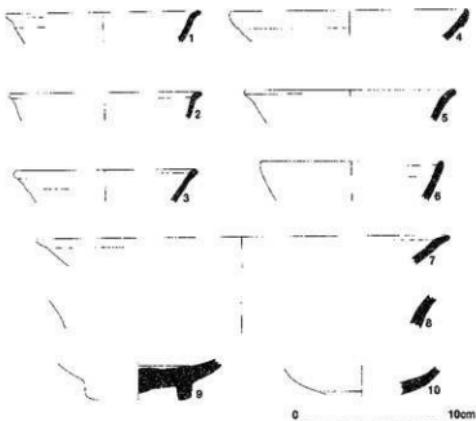
第23図 II区耕作土・床土（客土）出土遺物実測

1は壺の頸部である。細片であり全体の形は不明であるが明黄褐色を呈し、外面は細かな縦ハケ内面頸部以下はケズリがみられる。弥生末～古墳時代初頭のものであろうか。2～8は須恵器である。2は

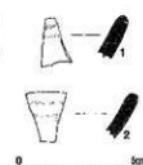
口径14.5cmほどの坏身である。器底は薄く焼成も良好で青灰色を呈している。3は薄く外反する高台の付くもので坏あるいは皿であろうか。高台の形に特徴があり邑智郡南部ではほとんど見られないものである。内面がかなり磨滅しており転用碗として使用されている。4は壺の底部で、ヘラ切り・回転ナデにより調整されている。5は半底の坏の底部と思われる。6は輪状つまみの付く坏蓋である。7・8は輪状高台の付く坏身である。このうち4・6・7・8の胎上には細かな白い砂粒が少量含まれており、いずれも焼成は良好で青灰色を呈している。これらの須恵器のうち2は7世紀初頭、他のものは概ね8世紀後半から9世紀中葉のものであろう。9は口縁部に円帯を持つ瓦質の深鉢である。10は東播系の鉢である。12世紀末～13世紀初頭頃のものであろう。11～14は備前焼の鉢であり、口縁部の形態から11は12世紀中～後半（第Ⅰ期第1段階）、12は14世紀後半（第Ⅱ期後半）のものと考えられる^⑨。13は15世紀（備前Ⅵ期）のものであろう。15～17は須恵質の擂鉢であるがいずれも焼きが悪く軟質である。東播系のものをまねてこの地方で作られたものであろうか。18～19は土師質の坏である。底部には糸切がみられ、体部は回転ナデにより調整されている。細片であり詳細は不明であるが体部が丸みを持って立ち上がっているように見えることから、12世紀中ごろのものと考えている^⑩。20は糸切痕を持つ須恵器の坏底部である。糸切痕を持つことから9世紀後半以降のものであろうが詳細は不明である。21～23は土師質の土錐である。

6. 輪之内遺跡出土白磁・青磁（第24・25図）

水田の床土中からは十数点の白磁・青磁などの輸入陶磁器が出土し注目される。いずれも客土に伴うもので細片であるが、同化できるものについて第24図に示している。1は玉縁の白磁碗で、IV類とされるものであり、11世紀末～12世紀前葉のものである^⑪。他はすべて青磁である。1・2・3・5は口縁部を緩やかに外反させた碗の口縁部で全体に細かな貫入がみられる。6はかなり釉が厚く緑色がかったり国産の可能性もある。7は皿である。内面は少し青みがあるが外面はかなり白っぽく一見白磁のようである。9・10は碗の底部である。9は高台の登付けと底の部分の釉薬は削り取られている。第25図1・2は青磁の碗の口縁部であるが外面にわずかに描文がみてとれる。やはり15世紀頃のものであろう。



第24図 輪之内遺跡出土白磁青磁実測図



第25図
青磁描文実測図

V 考 察

今回調査した場所は地形的にみて輪之内遺跡の北端にあたると考えられ、調査面積も少なく、また平成9年に羽須美村教育委員会により実施された試掘調査において明確な遺構が検出されなかつたということもあり、どのような調査成果を得ることができるかという不安を抱きながらの調査着手であった。しかし調査の結果、竪穴状の建物跡3棟と掘立柱建物1棟などが検出され、発掘調査例のあまりない羽須美村に貴重な資料を提供することができた。ここでは今回の発掘調査により検出された遺構や出土した遺物について若干の検討を加え、輪之内遺跡の性格やその歴史的背景について考えてみたい。

1. 繩文土器について

第6層から縄文土器の細片2点が出土している。このうち1点は波状口縁を持つ鉢型土器の口縁部で、細く直線的な沈線で区画された崩消縄文土器である。遺物が1点であるのでその詳細を比較検討することは困難であるが、このような特徴を持つ縄文土器は沖丈遺跡（邑智町）で多量に出土しており、「権現山式」（古）に先行する可能性が指摘されている⁽¹⁰⁾。したがって縄文時代後期前葉から中葉頃のものと思われる。

2. 柱穴状ピット群について

今回検出した柱穴状ピット群には水田化される以前のものと、水田化された後のものが見られる。前者は古代末から中世にかけての複数の建物に伴うものと考えられるが、調査区が限られていたため明確な遺構として捉えることができなかった。今後隣接する地区の発掘調査が行われればいくつかの遺構を復元できる可能性があると思われる。後者はすべて近代以降のものであり、水田耕作にかかるものや、この場所で昭和20年代に牛馬市が行わる、牛を繁ぐ構が置かれていたようであることから、これに伴うものも含まれている可能性がある。

3. 土壙状遺構群について

第6層に掘り込まれた上層状の遺構6についてはその上部が削られており深さが数cmしか残されていなかったこともあり、その性格は不明である。しかしSX01～SX04の4基については埋土が周辺で見られない上質であったり、焼土が入っているなど明らかに人為的に作られたものであり、墓壙である可能性が強いように思われる。年代は不明である。

SX05～SX06は新しい時期のものであり、水田を作る際に石を抜き取ったものである可能性が強いようと思われる。

4. SI01～SI03の建物跡について

SI01～SI03の建物跡は、その切り合い関係からSI03が最初につくられ、その後にSI03をさらに掘り込んでSI01～SI02がつくられている。SI01とSI02の前後関係は不明であるが、建物のラインがほぼ平行していることから同じ時期に企画性を持って作られた可能性が強いように思われる。それぞれの建物から出土している須恵器についてみても明確な形式差は認められず、概ね9世紀の前葉～中葉のものと考えられる。つまり9世紀の前葉の頃にSI03が作られ、その後9世紀中ごろ同じ場所にSI01とSI02がほぼ同時に建てられたものであろう。

SI03は南北2.5m東西3.4mの6本柱の建物であり、これはこの時期のこの地域での一般的な竪穴住居跡のほぼ倍の床面積を持つ大型の建物である。また通常の住居跡にみられる造り付けの竈もみられないこと

も注目される。しかしこの建物のほぼ中央にわずかに残された床面から、煮炊きに使用されたと考えられる土師器の甕が出土していることから一般的な生活の場（竪穴住居跡）であったと考えられる。大型の竪穴住居跡であること、転用窯が出土していることなどから、ここに輪之内遺跡の中核的な家族が居住していた可能性も考えられる。

SI01とSI02は同じ時期に併行して使用された可能性が強い。このうちSI02は3.0m×2.9mの竪穴住居跡としてこの時期の一般的な大きさであるが、やはり造り付けの甕が作られていないことが注目される。この住居跡はその中央を試掘調査により破壊されていたため詳細は不明であるが、試掘調査時に焼土などは検出されていないようであり、今回調査時にも残された床面からまとまった焼土や灰跡らしきものは検出できなかった。

SI01は2.7m×1.8mの建物跡で一般的な建物跡としてはあまりにも小規模であり、特別な用途の建物と考えられる。この建物からは煮炊き用に使用された土師器の甕が出土しているほか、北側壁際に60cmほどの範囲に硬くしまった粘土塊が置かれていた。この粘土塊は上部が削り取られていたため本来の形状は不明であるが、上側は熱を受けた痕跡がみられた。のことからこの建物はSI02に併設された調理専用の建物であり、SI02が日常の生活の場であった可能性が強いと考えている。この推定が正しいとすれば、集落内における建物群の構成とその利用形態を考えるうえで貴重な資料を提供したといえよう¹¹⁾。

5. SB01について

この掘立柱建物は、調査区内の柱穴の配置状況から推定したものである。調査で確認できたのは梁間1間（3.2m）桁行3間（6.3m）であるが、調査区域外まで拡がっているためその全容は不明である。ここでは他の遺跡での調査例を参考にこの建物跡について大胆に考察してみたい。

邑智郡内では近年の開発に伴い各地で発掘調査が行われており、古代にかかる掘立柱建物跡がいくつか検出されているが、その多くは柱間が1.9~2.1mである。これに対してこのSB01の梁間は3.2mであり通常の柱間の1.5倍となっていることが注目される。このような柱間をもつ建物跡は、血取場遺跡（石見町）寺ノ前遺跡（石見町）大地ノ元遺跡¹²⁾（石見町）などで検出されている。その建物はいずれも2間×3間の建物（身合）の片方に1間の庇を持つと考えられているもので、庇の梁間は常に身合の梁間の1.5倍となっている。さらに庇は必ず身合よりも低い方に作られていることも注目される。このような事例をこのSB01に当てはめると、今回検出した造構は、調査区外に存在するであろう建物（身合）に付随する庇部分である可能性が極めて強いように思われる。こうした身合の梁間よりも庇の梁間が長い建物は平安建築の特色とされており¹³⁾、柱穴から出土した遺物の年代観とも合致する。またこのSB01の桁行の柱間は2.5~2.9mであり大地ノ元遺跡の礎石建物とはほぼ同じであることから、大地ノ元遺跡の礎石建物とは同規模の建物が建てられていたものと考えることができる。

6.まとめ

今回の調査では縄文時代の造構は検出できなかったが、縄文時代後期前葉から中葉にかけての土器片が出土し、少なくともこの時期にはこの場所に私たちの祖先が東住していたことを示している。これまで羽須美村地内では菅原遺跡（戸河内）で縦型石甕が出土しているほか、村内の各地で磨製・打製の石斧が採集され、縄文時代の遺跡の存在は予想されていたが、明確な縄文土器の発見はその最初の例であり重要な意義を持つものといえる。¹⁴⁾

弥生時代では後期後葉の遺物が出土しており、この時期から現在まで集落が營まれ続けた事を今回の出土遺物が示している。しかし遺跡が非常に恵まれた場所に立地していることから、弥生時代のより早い段

階から集落が営まれたであろうことが予想される。今後調査が進めば、こうしたより古い時期の遺構や遺物が発見される可能性が高いと考えている。

今回出土した遺物の中では須恵器の量が最も多い。その大半は平安時代初め頃のものであるが、古墳時代後期（7世紀初頭ころ）の蓋環や高壺が数点出土しており注目される。近くにこうした須恵器を廟葬した古墳があったことも考えられよう。

検出した遺構は平安時代初頭（9世紀前葉から中ごろ）の建物3棟と平安時代後期の掘立柱建物1棟である。このうち平安時代初頭の建物は、まずSI03が建てられ、その後ほぼ同じ場所にSI01とSI02が建て直されているが、この2つの建物は調理専用の建物と主屋という関係で同時に併用されていたものと考えられる。

ところでこのSI03は、この時期に見られる一般的な堅穴住居跡の約2倍の床面積を持つ大型の堅穴住居跡である。またSI01とSI02もこの二つの建物をセットで考えると、一般的な窓を持つ堅穴住居跡よりもかなり広い床面積を持つといえる。またSI02とSI03では須恵器の壺を転用した甕が出土しているが、これより別に転用甕はこれらの堅穴住居跡の周辺で7固体分も出土していることをみると、ここでは文字を使用する必要がかなり高かったことがうかがえる。こうした点から、この輪之内遺跡は出羽川下流域における拠点的な集落であり、その中でも今回の調査区の周辺に重要な施設が集中していた可能性が強い。当時出羽川流域は「神稻郷」と呼ばれていたが、この輪之内遺跡は郷衙を補完するような機能を持った重要な集落であったことも考えられる。平成9年に行われた試掘調査時に、今回の調査区より少し北寄りの地点から9世紀後半の灰釉陶器の甕が出土していることからも、この時期におけるこの遺跡の重要性を窺うことができよう。

中世の遺物としては白磁・青磁などの輸入陶磁器や、東播系の須恵器・備前焼の擂鉢などが水田客上中から出土しており注目される。水田の客上は遺跡の南側、現在の県道あたりから運ばれたものと考えられることから、この付近に中世の遺構があったものと思われる。

これらの遺物のうち、白磁はその特徴から11世紀末～12世紀前半のものと考えられ、前代に引き続き有力な一族がここに居住していたことを示している。

備前焼などの国産陶器は中世全般を通じてみられるが、輸入陶磁器である青磁は15世紀頃のものである。羽須美村内では菅城遺跡（戸河内）・坪ノ内遺跡（長田）などでも東播系・龜山系の中世須恵器・備前焼の擂鉢、白磁・青磁などの輸入陶磁器が出土しており、こうした資料の少ない邑智郡では特異な地域として注目されている。羽須美村におけるこのような豊富な中世遺物、とりわけ14～15世紀の輸入陶磁器の存在は、蘿掛城（羽須美村木須川）を本拠として邑智郡南部を領有し、安芸・備後にまで勢力を拡大してこの地域の国人衆の盟主的存在となった高橋氏の力を抜きには考えられないものである。

最後に「輪之内」という地名について考察してみたい。輪之内という地名は「岐阜県安八郡輪之内町」に代表されるように、周囲を川で囲まれた低地にあり、水害防止のための堤を巡らせた開堤集落を呼ぶ例が知られている。また、中世の山城の周辺に輪之（ノ）内という地名が残されている例も多く知られている。例えば、二つ山城跡（瑞穂町）の場合は、城の麓の永明寺地区が輪ノ内と呼ばれているが、ここには「殿塙敷」「殿廻」「大門」「門」などの地名が残されており、二つ山城主の館があつたものと推定されている。つまり城主の館を中心としてその一帯が「郭」「曲輪」の中という意味で輪ノ内と呼ばれているのである。この輪之内遺跡の西には轄屋城があり、遺跡の正面には琵琶甲城が聳えていることを考えると、輪乃内という地名は二つ山城に見られるように、これらの中世山城に関係したものであり、周辺のどこかに

この時代の「館」が存在した可能性が極めて強いように思われる。輪之内遺跡で出土している中世の輸入陶磁器もこの推定を裏付けるものであろう。

輪之内遺跡は出羽川下流域での拠点的な集落遺跡と考えられ、遺跡は今回の調査区から南西に拡がっているものと考えられ、この地域としては規模の大きなものである可能性が強い。今後広い範囲での調査が行われれば、古代から中世にかけてのこの地域の歴史を探るうえで貴重な資料を提供してくれるものと考えられる。遺跡分布密度の少ない羽須美村にとってきわめて重要な遺跡といえよう。

注

- (1) 『坪ノ内遺跡・輪ノ内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』羽須美村教育委員会 1998年
- (2) 横山紘夫 「羽須美村の古代史」「羽須美村誌上巻」 羽須美村誌編集委員会 1987年
- (3) 『蒼城遺跡発掘調査報告書』羽須美村教育委員会 1996年
- (4) 『坪ノ内遺跡・輪ノ内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』羽須美村教育委員会 1998年
- (5) 寺井 裕氏と現地を踏査し縄張り図を作成した際このように感じた。このときの縄張り図は寺井氏により下記の報告書に掲載されている。
「島根県中世城館跡分布調査報告書第1集『石見の城館跡』」島根県教育委員会 1997年
- (6) 羽須美村教育委員会 角矢永嗣氏の教示による。村営住宅建設に伴う発掘調査により中世古墓・中世の建物の礎石などが遺構が検出されている。
- (7) 間壁忠彦「考古学ライブラリー60『肥前焼』」 ニューサイエンス社
- (8) 古代後半から中世の上質土器は、この地域で綱年の研究が遅れている部である。しかし古市遺跡(浜田市)などで輸入陶磁器とともに作出する例が知られるようになり、その研究が進められつつある。
原 裕司 「浜田市・古市遺跡出土の遺物『松江考古第8号』」 松江考古学談話会 1992年
柳原博英 「浜田市・古市遺跡における中世前半の土器について『松江考古第9号』」 松江考古学談話会 2001年
- (9) 「日本出土の貿易陶磁 西日本編1『国立歴史民族博物館博物館資料調査報告書4』」 国立歴史民族博物館 1993年
- (10) 千葉 豊 「沖丈遺跡出土遺物特論1 縄文土器論 沖丈遺跡出土縄文後期時の綱年の意義『沖丈遺跡』」 邑智町教育委員会 2001年
- (11) このような炊事専用の建物と考えられる堅穴の例は、弥生時代後期後半の事例ではあるが、沖丈遺跡(邑智町)や川ノ免遺跡(瑞穂町)でみられる。
- (12) 「石見町文化財調査報告書 第17集『大地ノ元遺跡』」 石見町教育委員会 1999年
血取場遺跡は町立ゲートボール場建設に伴い1993年に発掘調査が行われ、契鉄関係遺跡のほか、8世紀末～9世紀前半の庇を持つ建物跡1棟が検出されている。寺ノ前遺跡(天藏寺原)では大型の壇型をもつ壇立柱建物跡12棟以上が整然と建てられていた。このうち2棟が庇を持つ建物であった。いずれも報告書は未刊である。
- (13) 広島大学工学部 三浦正幸氏による大地ノ元遺跡調査時の現地指導会でのご教示による。
- (14) 「羽須美村の古代史」「羽須美村誌上巻」(注(2)と同じ)によれば、阿須那今西地区において岡場整備中に縄文土器片と打製石斧が出土したとされ、打製石斧の実測図が示されている。しかし縄文土器についてはその詳細は述べられていない。現在ではその所在も不明である。

土器観察表

坏蓋の底径はつまみの径を示す

掉回番号 遺物番号	器種	大きさ			形態 調整 その他	色調	胎上	焼成
		口徑	底径	高さ				
13-1	土師器 壺	17.6	—	約17	胴部外面横ハケ 底部縫ハケ 内面縫ハケ・ナデ 外縫スス付着	黄茶褐色	白い砂粒を含む	良
13-2	土師器 壺	16.6	—	—	タタキにより整形 スス付着 内面は丁寧にナデ消す	暗茶褐色	砂粒はほとんどない	良
13-3	土師器 壺	—	—	—	内面丸いケズリ	赤褐色	細かい砂粒を少量含む	良
13-4	土師器 壺	—	—	—	底部ハラ切り ナデ かなり風化	明黄褐色	細かい砂粒	不良
13-5	須恵器 盖	17.4	—	—	薄く丁寧に作られている 回転ナデ	黒青灰色	砂粒はほとんどない	良
13-6	須恵器 脚		14.0		薄く丁寧に作られている 自然輪付着	青灰色	細かい砂粒を少量含む	良
13-7	須恵器坏身	14.6			回転ナデ	やや白っぽい	細かい砂粒を少量含む	不良
13-8	須恵器坏身		13.0		回転ナデ	青灰色	細かい白い砂粒を少並含む	良
14-1	須恵器坏蓋	14.3			回転ナデ	青灰色	細かい白い砂粒を少並含む	良
14-2	須恵器坏蓋	15.8			回転ナデ 転用鏡	青灰色	細かい白い砂粒を少量含む	良
14-3	須恵器坏身	14.2	11.1		回転ナデ	黒青灰色	細かい白い砂粒を少量含む	良
14-4	須恵器坏身	14.0			回転ナデ	青灰色	細かい白い砂粒を少量含む	良
14-5	須恵器坏身	13.7			回転ナデ	白っぽい	細かい白い砂粒を少量含む	不良
14-6	須恵器坏身	14.8			回転ナデ	白青灰色	細かい白い砂粒を少量含む	良
14-7	須恵器坏身		9.7		ハラ切り 回転ナデ	青灰色	砂粒をほとんど含まない	良
14-8	須恵器坏身		11.0		ハラ切り 回転ナデ	白青灰色	細かい白い砂粒を少並含む	良
15-1	土師器 壺	29.4			タタキにより整形 スス付着 内面は丁寧にナデ消す	明茶褐色	細かい砂粒を少量含む	良
15-2	土師器 壺				外 横かなハケ 内 ケズリ後ナデ	黄褐色	砂粒を少並含む	不良
15-3	須恵器坏蓋	14.1	4.8	27	回転ナデ 転用鏡?	青灰色	細かい白い砂粒を少量含む	良
15-4	須恵器坏身	14.2			回転ナデ	白っぽい	細かい砂粒を少並含む	不良
16-1	土師器 壺	23.6			外 横ハケ 縫ハケ スス付着 内 横ハケ ケズリ		砂粒を少並含む	良
16-2	土師器 壺	17.4			外 横ハケ 縫ハケ 内 横ハケ ケズリ	明茶褐色	砂粒を含む	良
16-3	須恵器坏身	14.3			回転ナデ	やや白っぽい	細かい砂粒を少量含む	不良
16-4	須恵器坏身		11.1		回転ナデ	青灰色	細かい白い砂粒を少量含む	良

押岡番号 遺物番号	器種	大きさ			形態 調整 その他	色調	胎土	焼成
		口径	底径	高さ				
17-1	土師器 壺		6.4		高台付 糸切り 横ハケ ナデ		砂粒をほとんど含まない	不良
17-2	土師器 壺		7.1		平底 糸切り		砂粒をほとんど含まない	良
17-3	土師器 壺		7.2		高台付 糸切り ナデ		砂粒をほとんど含まない	不良
19-1	縄文土器鉢				くの字に内傾する波状の口縁部 細い沈線により区画された底辺 縄文 内面 磨き	暗茶褐色	砂粒を含む	良
20-1	土師器 壺				外面 横ハケ 縦ハケ	黄褐色	荒い砂粒を含む	良
20-2	上師器 壺				外面 横ハケ 縦ハケ 内面 ケズリ	黄褐色	荒い砂粒を含む	良
20-3	上師器 壺	11.0			内面 ケズリ	黄白褐色	砂粒を少量含む	不良
20-4	須恵器壺蓋				外面上半ケズリ	青白灰色	砂粒を少量含む	良
20-5	須恵器壺身	13.5	3.5		外面 ケズリ ナデ 内面 横ナデ	灰色	砂粒を少量含む	良
20-6	須恵器高壺				長方形の連かし 2方向 回転ナデ	青灰色	砂粒を少量含む	不良
20-7	須恵器壺蓋	20.0	7.4	3.2	回転ナデ 転用鏡	青灰色	細かい白い砂粒を 少量含む	良
20-8	須恵器壺蓋	14.4			回転ナデ	青灰色	細かい白い砂粒を 少量含む	良
20-9	須恵器壺蓋	14.2			回転ナデ	青灰色	細かい白い砂粒を 少量含む	良
20-10	須恵器壺蓋	14.2			回転ナデ	白灰色	砂粒を少量含む	良
20-11	須恵器 壺	14.0			薄く丁寧なつくり 回転ナデ	灰色	砂粒を少量含む	良
20-12	須恵器壺身		10.4		回転ナデ	白灰色	砂粒をほとんど含まない	不良
20-13	須恵器壺身		10.5		回転ナデ 転用鏡	青灰色	細かい白い砂粒を 少量含む	良
20-14	須恵器壺身		10.9		回転ナデ	黒青灰色	砂粒を少量含む	良
20-15	須恵器壺身	14.0	10.8	4.8	回転ナデ	白灰色	細かい白い砂粒を 少量含む	不良
20-16	須恵器壺身	19.4			回転ナデ	青灰色	細かい砂粒を少量 含む	良
20-17	須恵器壺身	19.0			回転ナデ	青灰色	細かい白い砂粒を 少量含む	良
20-18	須恵器壺身		11.0		回転ナデ 転用鏡	青白灰色	細かい砂粒を少量 含む	不良
20-19	土師質上鍤					赤褐色	砂粒をほとんど含まない	
20-20	土師質上鍤					黒褐色	白い砂粒を含む	
20-21	土師質七鍤				太く短い	明黃褐色	砂粒をほとんど含まない	

辨別番号 遺物番号	器種	大きさ			形態 調整 その他	色調	胎土	焼成
		L径	底径	高さ				
21-1	土師器 壺	14.6	7.0	4.1	底部 糸切り 体部 回転ナデ	暗黄褐色	荒い砂粒を含む	良
21-2	土師器 壺?				かなり風化	明黄褐色	砂粒を含む	
21-3	土師器 壺		8.1		底部 糸切り 体部 回転ナデ	黒褐色	砂粒を少量含む	良
21-4	須恵器壺蓋	15.4			回転ナデ	青灰色	細かい白い砂粒を 少量含む	良
21-5	陶質上器 深鉢	20.0			ナデ調整 内外にスス付着	暗赤褐色	白い砂粒を少量含 む	良
21-6	陶器 楠鉢 備前焼				12本の線	赤褐色	砂粒を含む	良
22-1	土師器 壺				かなり風化 横ハケ	黄褐色	細かい砂粒を含む	
22-2	土師器 壺					明黒褐色	砂粒を少量含む	
22-3	土師器 壺	36.0			口縁部内面横ハケ 外面荒いいハケ	黄褐色	砂粒を含む	良
22-4	土師器 壺	18.6			外面 細ハケ 内面ケズリ ハケ		荒い砂粒を含む	良
22-5	土師器 壺		7.0		かなり風化		細かい砂粒を含む	良
22-6	須恵器 壺				タクキにより整形後ナデ調整 外面回転ナデ	青灰色	細かい砂粒を含む	良
22-7	須恵器壺身	13.2			回転ナデ	灰色	白い砂粒を少量含 む	不良
22-8	須恵器壺蓋		3.7		回転ナデ 自然釉付着	青灰色	白い砂粒を少量含 む	良
22-9	須恵器壺蓋				自然釉付着	青白灰色	細かい砂粒を含む	良
22-10	須恵器 壺				回転ナデ	青灰色	細かい砂粒を含む	良
22-11	須恵器壺身	14.2			回転ナデ	青灰色	細かい砂粒を含む	良
22-12	須恵器壺身	14.8			回転ナデ	青灰色	白い砂粒を少量含 む	良
22-13	須恵器壺身	14.8			回転ナデ かなり歪みあり	青灰色	白い砂粒を少量含 む	不良
22-14	須恵器壺身		11.0		回転ナデ	青灰色	白い砂粒を少量含 む	良
22-15	須恵器壺身		11.1		回転ナデ 底部横ナデ	青灰色	細かい砂粒を含む	良
22-16	須恵器壺身		11.6		回転ナデ	青灰色	細かい砂粒を含む	良
22-17	須恵器壺身		11.0		回転ナデ 高台の形が他と少し違う	青灰色	白い砂粒を少量含 む	不良
22-18	須恵器壺?		10.5		底部ヘラ切り後横ハケ	黒青灰色	白い砂粒を少量含 む	良
22-19	須恵器壺身				内面かなり摩滅	青白灰色	砂粒を含む	不良
22-20	土師質桶鉢				内面かなり摩滅	外面赤褐色 内面は黒い	砂粒を含む	
22-21	須恵器壺身				荒いナデ調整 内面かなり摩滅	黒青灰色	白い砂粒を含む	不良
22-22	備前焼壺身	48.0			荒いナデ調整	青灰色	荒い砂粒を含む	良

22-23	須恵質搗鉢	12.6	荒いナデ調整	青灰色	砂粒を含む	良
22-24	備前焼搗鉢	13.0	ナデ調整	一見須恵器のよう	細かい砂粒を少量含む	良
22-25	備前焼搗鉢		荒いナデ調整	赤褐色	砂粒を含む	良
22-26	備前焼搗鉢		荒いナデ調整	赤褐色	砂粒を含む	良
22-27	土師質土錘		太く短い	やや白っぽい	砂粒を含む	良
23-1	土師器 売		外面 糙ハケ 内面 ケズリ	明黄褐色	砂粒を含む	
23-2	須恵器环身	14.5	回転ナデ調整	青灰色	白い砂粒を少量含む	良
23-3	須恵器 皿	14.6	底部ヘラ切り 回転ナデ 転用鏡		砂粒をほとんど含まない	良
23-4	須恵器 壺	6.6	へら切り 回転ナデ	青灰色	細かい白い砂粒を少許含む	良
23-5	須恵器 坯	10.8	回転ナデ調整	白青灰色	砂粒をほとんど含まない	不良
23-6	須恵器环蓋		回転ナデ	青灰色	細かい白い砂粒を少量含む	良
23-7	須恵器环身	10.6	ヘラ切り 回転ナデ	青灰色	細かい白い砂粒を少量含む	良
23-8	須恵器环身	10.9	ヘラ切り 回転ナデ	青灰色	細かい白い砂粒を少量含む	良
23-9	土師質深鉢	14.2		明茶褐色	細かい砂粒を含む	不良
23-10	東播系	30.0	回転ナデ Ⅱ期第2段階	白青灰色	細かい砂粒を含む	不良
23-11	備前 鉢	25.0	ナデ調整 Ⅱ期第1段階	一見須恵器風		良
23-12	備前 鉢	22.7	Ⅱ期後半	黒青色	細かい砂粒を少量含む	良
23-13	備前 鉢	29.4	ナデ調整	赤褐色	荒い砂粒を含む	良
23-14	備前 搗鉢	22.0	内底に指頭圧痕 外面 細かなハケ	一見須恵器風	細かい砂粒を含む	良
23-15	須恵質搗鉢	28.5	外面荒いハケ	灰白色	細かい砂粒を含む	不良
23-16	須恵質搗鉢		回転ナデ	灰白色	細かい砂粒を含む	不良
23-17	須恵質搗鉢		回転ナデ	灰白色	細かい砂粒を含む	不良
23-18	土師質 坯	5.1	底部糸切り 内面ナデ	赤褐色	細かい砂粒を少量含む	良
23-19	土師質 坯	6.2	底部糸切り	黄褐色		不良
23-20	須恵器 坯	6.2	底部糸切り 内面回転ナデ	青灰色	細かい白い砂粒を少量含む	良
23-21	土師質土錘			茶褐色	細かい白い砂粒を含む	
23-22	土師質土錘		鉄分付着	黑褐色	細かい白い砂粒を含む	
23-23	土師質土錘			黄褐色	細かい白い砂粒を含む	

VI 特別寄稿

輪之内遺跡の地形的環境 中村唯史（島根県立三瓶自然館）

輪之内遺跡

地形と立地

地形概要

羽須美村は中国山地のほぼ中央部に位置し、東縁を江の川が流れている。中国山地は中国準平原と称されることもある。準平原は地形輪廻の中で「老年期」にあたるもので、浸食作用で形成された起伏が小さい地形が特徴である。中国山地の脊梁部には1000m級の峰が連なるが、その南北には、それぞれ吉備高原面、石見高原面と称される標高400～600mのなだらかな丘陵地が広がる。山陰側の石見高原面は起伏に富んでいるため、「面」という印象を受けることは少ないが、高い山から見下ろすと、峰や稜線の高度が揃っていて、巨視的には扁平な地形であることが判る。

江の川は中国山地脊梁部の南側（瀬戸内側）に流れを発し、中国山地を横断して日本海に注いでいる。山地の形成に先行していた河道が維持されているという意味で、このような河川は先行河川と呼ばれる。江の川は中国地方では唯一の先行河川である。

当地を地質的にみると、非変成の古生層が分布していることが特徴である。島根県に分布する古生層には、隕岐に分布する隕岐片麻岩や、石見部に分布する三郡変成岩などがあるが、非変成の古生層は、当地のほかは六日市町などに点在するのみである。また、羽須美村内の分布は貧弱であるが、西隣の瑞穂町から広島県の三次市、庄原市一帯にかけて、貝などの海生生物の化石を産する中新統（2500万～520万年前）の「備北層群」が断続的に分布している。このことは、中国山地が隆起する以前に当地一帯に海が進入していたことを示している。

遺跡の立地

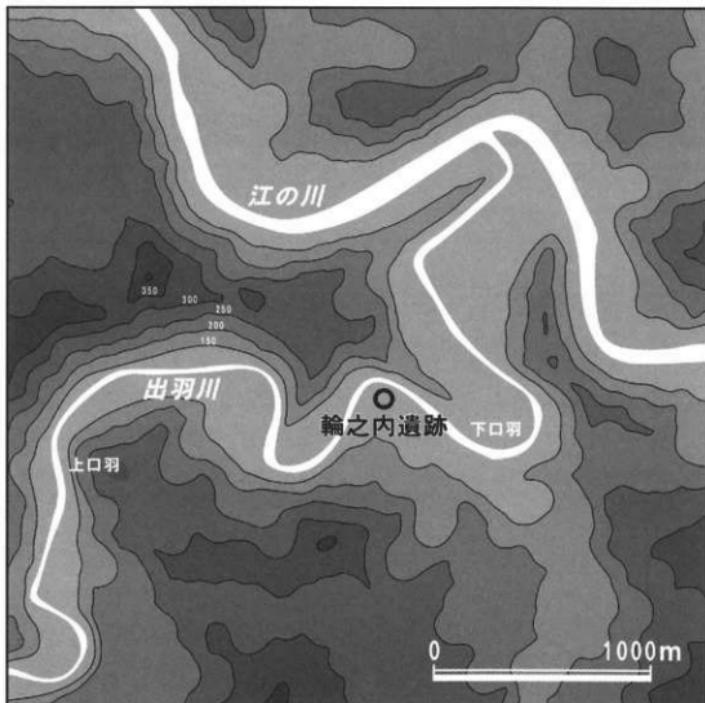
輪之内遺跡は、羽須美村を東西に横切って流れる出羽川の右岸に位置する。出羽川は瑞穂町内から流れを発し、石見高原面および低位の都野津面に相当する標高200～400mの準平原を侵食しながら流れ、江の川に合流する。本遺跡付近では大きく蛇行を繰り返し、蛇行の外側（攻撃斜面側）では、石見高原面と河床との高度差が200m以上に達する急崖をみることができる。

遺跡が立地しているのは、出羽川が北に蛇行している場所で、蛇行の内側に発達した沖積面である。この地形は、河川が攻撃斜面側を侵食しながら移動していくことによって潜走斜面側に形成された蛇行州である。山間部では河川が河床を掘り下げようとする下刻作用が強いため、古い蛇行州堆積物は高い位置に残される。こうして取り残された地形面は河岸段丘と呼ばれ、県道沿いの集落が位置する面がこれに相当する。輪之内遺跡が立地する面は現河床より若干高いが、遺跡立地面の地形的環境は現河床と連続した「氾濫原」としてよいであろう。

本遺跡の基本的な層序は、上部では泥質分に富み、下部は疊層と砂層の互層である。これは、より古い時期には河川の氾濫によってしばしば粗粒な堆積物が供給されていたが、やがて氾濫の影響が弱くなり、

粗粒分が供給されにくくなるとともに地表面が土壤化したことを示している。氾濫の影響を受けにくくなった主な理由として、人的開発と河床の低下のふたつが考えられる。人的開発の影響は自然条件の変化に比べて極めて急速で、近世以降においては強制的に環境を変えてしまうことも少なくない。しかし、本遺跡が中世以前にさかのほることを考慮すると、堆積の進行と河床の下刻によって河床が相対的に低下し、付近が安定化することによって、田畠や居住地として利用可能となり、そこへ護岸整備等の人的開発が加わったと考えるのが妥当であろう。

下部の礫層、砂層については、基本的には河道からあふれ出した氾濫流がもたらした氾濫堆植物とみられる。氾濫によって河道の位置が変化することもあるが、当地の河道位置は両岸の基盤地形に強く規制されているので、過去数千年間というタイムスケールでみると、定常的には現在の位置を流れていることが多かったといえる。



調査地周辺の接峰面図

幅500m以下の谷を埋めた地形図。調査地の周辺では標高250~350mのなだらかな地形面が広がり、それを出羽川が削り込んで流れている様子がわかる。

図版

凡例

図版中の出土遺物●▲-▲●は、挿図
中の第●▲図▲●に対応する。

図版1



遺跡遠景 空撮 南東より



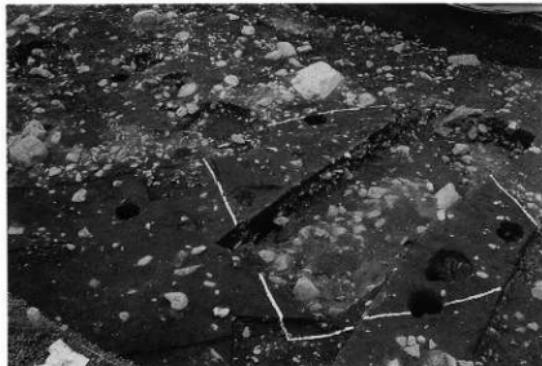
遺跡近景
(調査前) 南西より



東西土層断面 北より



図版 3



SI01、SI02
検出状況 南東より



SI01、SI02
発掘後 北東より



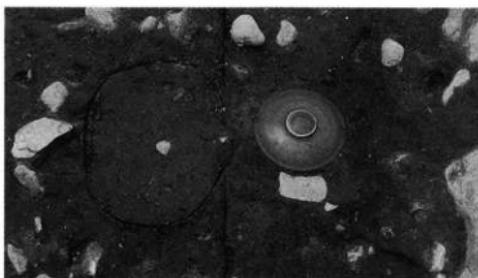
SI01
遺物（12-1・14-1他）出土状況 南より



SI03
完掘状況 南より

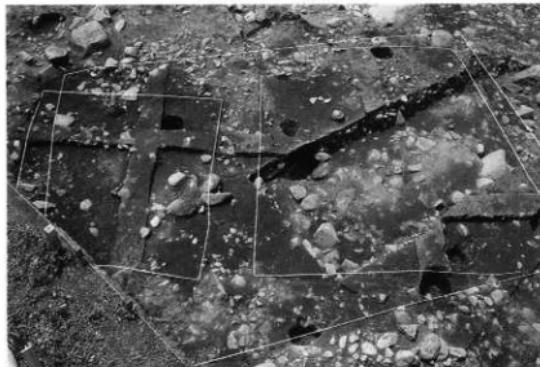


SI03
遺物（13-9・14-1）出土状況 北より
(手前棒状鉢13-9はSI02床面)



SI03
遺物（14-3）出土状況 北東より

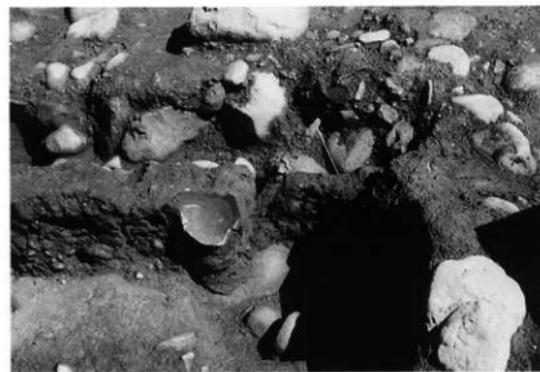
図版 5



SI01、SI02、SI03
位置関係 南東より



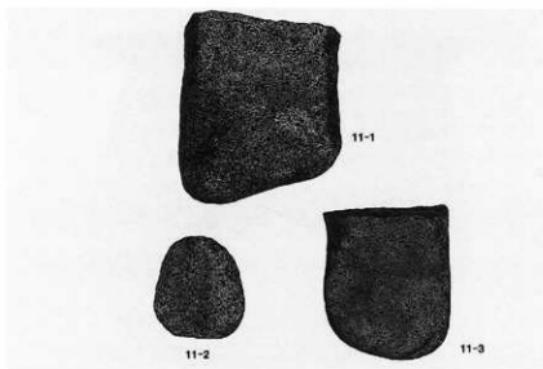
SB01
全景 北西より



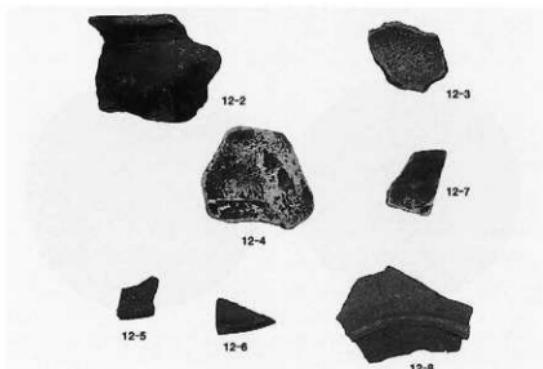
SB01
柱穴 (P5) 内
遺物 (17-1・17-4) 出土状況 南より



SI01
出土遗物

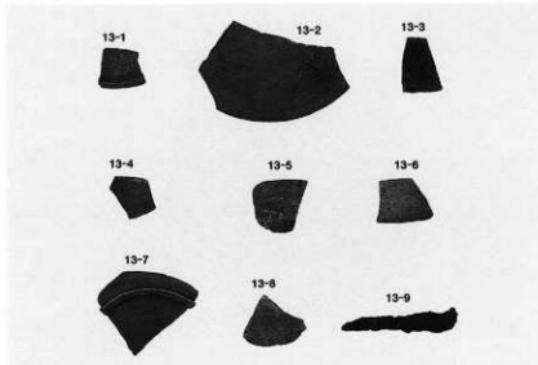


SI01
出土遗物



SI01
出土遗物

图版 7

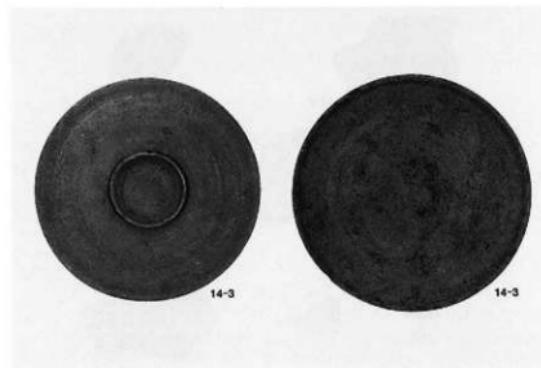


SI02
出土遗物



14-1

SI03
出土遗物

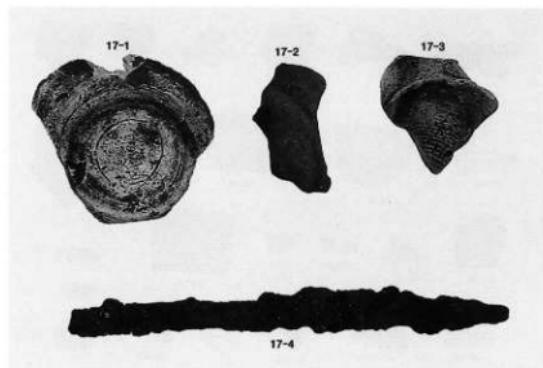


14-2

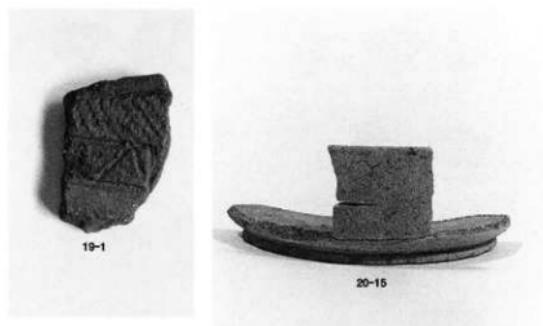
14-3

SI03
出土遗物

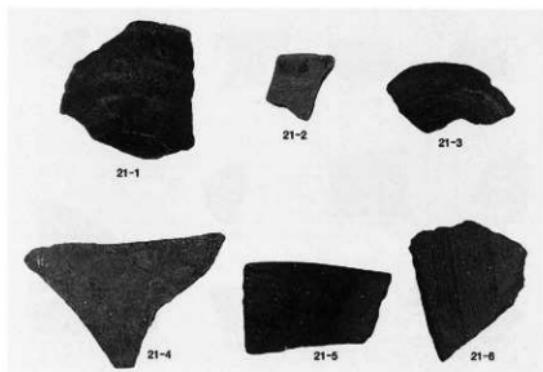
SB01柱穴及び
周辺出土遺物



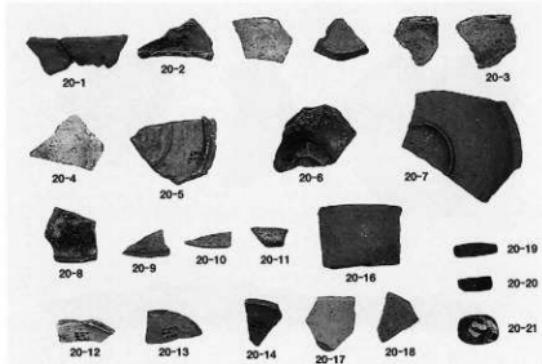
第6層出土網文土器



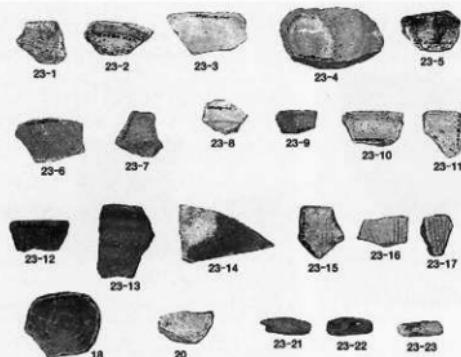
第5層出土遺物



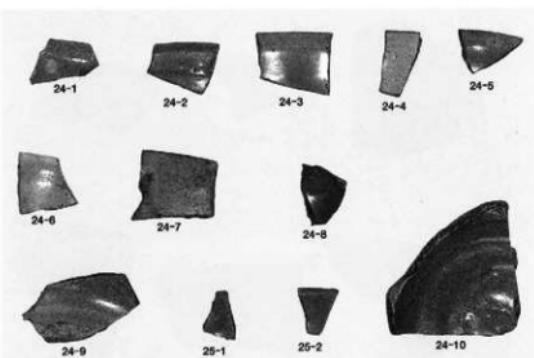
图版 9



I 区
黑色土层
出土遗物



II 区
耕作庄上
出土遗物



青磁白磁

報告書抄録

ふりがな	わのうち いせき						
書名	輪之内遺跡 (WANOUCHI ISEKI)						
副書名	(主)浜田作木線下口羽工区緊急地方道路整備(特一)工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	羽須美村 埋蔵文化財調査 報告書						
シリーズ番号	第5集						
編著者名	吉川 正 きっかわ ただし						
編集機関	羽須美村 教育委員会 はすみむら きょういくいいんかい						
所在地	〒696-0692 島根県邑智郡羽須美村大字下口羽484番地1 TEL 0855-87-0220						
発行年月日	西暦2004年(平成16年) 3月						
所在遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	発掘調査期間	調査面積	調査原因
輪之内遺跡	島根県邑智郡 羽須美村 大字下口羽 472番地1 (根布集落地内)	市町村	遺跡番号	度	度	20030602 ～ 20030810	136.5m ²
		32444	島根石見 G-94	分	分		
秒	秒						道路工事
所在遺跡名	種別	主な時代	主な遺構				特記事項
輪之内遺跡	集落遺跡	平安時代初頭 (9世紀前葉～中葉) 平安時代後期	縄文時代後期前葉～中葉の土器 弥生時代後期後葉の土器 古墳時代後期の上器 平安時代前期の転用硯 中国製貿易陶磁器・東播系中世須恵器・ 備前焼 他				平安時代初頭～ 後期の集落跡 転用硯の出土

鳥取県邑智郡羽須美村

輪之内遺跡

WANOUCHI ISEKI

(主) 浜田作木線下口羽工区
緊急地方道路整備(特….)工事 予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書
2004年3月

発行 羽須美村教育委員会

印刷 柏村印刷株式会社